

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

「佐佐木高行日記」と彼の人生観

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1984-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/673

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「佐佐木高行日記」と彼の人生観

岡田精一

目次

はじめに

一、「佐佐木高行日記」と高行の活躍

二、逆境と人間形成

(1) 動乱と貧困の時代

(2) 下級武士の家に生まれて

(3) 立志と修業

(4) 赤貧と動乱の中で

三、「中正」を軸とした活躍

(1) 大政奉還への根廻し

(2) 長崎騒擾の鎮撫

(3) 司法への尽力

(4) 君主国家への構想

四、現代が佐佐木高行に学ぶもの

「佐佐木高行」年譜

はじめに

今日、日本はめざましい経済成長と技術の革新において世界の注目を浴びている。しかし、それに比べ、今我々はどれほど精神的向上を考えているだろうか。ユーラシア大陸の一端に飛び島として位置する小さな日本が、これまでの発展を遂げたのは、我々の祖先が常にわが国民性に誇りをもち伸展に寄与してきたからだ。長い鎖国の扉を開いた明治期においても、そうである。世界の広さとその多彩な文明に戸惑いながらも明治人は、独自の精神性を叫び続けてきた。

「どのように磁味^{かじ}嘉肴^{かじ}があっても、じょうぶな胃の腑がなければこれを消化できない。のみならず、喰うためにかえって病気をひきおこす」

(注1)

物質文明、技術文明を受け入れるのに、精神的土壌がいかに大切な、佐佐木高行のこのたとえは、そのまま現代人への警鐘でもあろう。

終戦を境に、既成道徳は大きく変わったというものの、我々は相変わらず祖先から伝えられている慣習道徳に支えられて生活している。(注2) 精神生活においても、終戦時まで日本人の心を支えてきた明治以来のイデオロギーは、やはり我々の心の中に今も息づいていると思うし、それを無視した時代精神は、砂上の楼閣に等しい。「佐佐木高行日記」を通して、ひとりの明治人の生き方をとり上げたのは、佐佐木高行の中に、その功罪をも含めて、我々が受け継いだ日本人の血の流れを色濃くみただけである。又彼の生きた時代の背景をみ、その生き方に思いを至すこと

は、自分自身の生き方の根元を探ることのように思えたからである。

維新より既に百十余年、各国が世界の一環として作用しつつある現在、自国中心的な政治政策は戒められなければならないが、それは世界地図を一色に塗りつぶすことではない。国々が、各個人が、それぞれの個性を伸ばしてこそ、豊かな文化の発展もあるのである。

国民性とは、その国土から生まれた精神のキャラクターである。日本人には日本人特有の精神文化の特性がある。国際交流が、できるだけ、国民性を生かそうとする現在、明治へさかのぼって、佐佐木高行の人格形成をみるのは、置き忘れてきた日本精神のエッセンスを探るためである。

一、「佐佐木高行日記」と高行の活躍

佐佐木高行は、天保元年(一八三〇年)から、明治四十三年(一九一〇年)まで、動乱の八十一年間を活躍した幕末から明治への勤皇家である。といっても、おそらく彼は、維新史の研究者や郷土史研究者(注3)を除いてはあまり知られていないであろう。貧困の家庭より身を起こして、「従一位勲一等侯爵」という地位を与えられた高行は、土佐の偉人伝中の一人(注4)に数えられている。が、それにしても、同時代、同藩出身の坂本竜馬・後藤象二郎・板垣退助らに比べ、あまりにも目立たぬ存在だった。彼の生涯は松舞台で脚光を浴びるよりも、舞台の裏方の仕事に

心を尽くすことに貫かれた。私がここに掘り起こしたいと思うのも彼の業績の時代的意義というよりむしろ、彼の人間性とその思想の軸についてなのである。

それにしても高行の残した遺稿は尨大なものである。明治の英雄豪傑、雲の如しといえども、高行ほど記録を残した人は稀であろう。長年高行に仕えた津田茂麿によれば、彼の残した著作は次の通りである。

(注5)

- 反古拾ひ(保古飛呂比) 百二十冊：佐佐木高行日記、明治維新前からの出来事を書いたもので、幕末から明治時代にかけての一史料
- 自笑日記 (自筆本) 八十二冊
- 自笑日記 () 十五冊
- かざしの桜 () 十冊：宮中および御養育上のことを書いた秘録で門外不出
- 三つ葉柏 (自筆本) 一冊：土佐藩のことを書いたもの
- 自笑歌集 () 十冊：自作の和歌三千余首
- 奥の雪みち (和文) 一冊：東北巡視中の記事
- 備忘録 (自筆本) 一冊
- 征清軍関係留 () 一冊
- 欧米巡視日記 () 一冊
- 証書留 一冊
- 日露媾和当時の書簡留 一冊
- 他 明治会叢誌等に掲載の諸論文 十九編

神社協会雑誌 一編

全国神職会報等に掲載の諸論文 六編

皇典講究所誌 一編

国学院雑誌 三編

明治維新に高行がおかれた立場は、舞台裏とはいえ歴史を動かす微妙な鍵を握る位置にあった。そのため高行は、自分の目でみた真実を書き残さずにはいられない心境が働いていたにちがいない。それだけ彼は、自分の生き方に誠実であったし、またその見識と文筆力に自負心もあった。彼の誠意は、外部への活躍と同様、自分の内部にも向けられ、それが日記をはじめこの尨大な著書を生んだのだと思う。

ところが、歴史学者、色川大吉氏のように「この中でも我々一般の歴史家が自由に閲覧できるものは、(雑誌は別として) 僅かに「反古拾ひ」(保古飛呂比) 一種(前半)のみであり……この後半は宮内庁に保管されていて自由な閲覧や使用を許されていない。」(注6)つまり「反古拾ひ」前半とは、原本百二十冊中の六十三冊を維新史料編纂会が筆写し、現在「保古飛呂比―佐佐木高行日記」全十二巻として、東京大学出版会から発行されているものである。そこには、高行の生まれた天保元年から明治十六年までの記録が書かれているのみである。ただその補足に津田茂麿の著書「勤皇秘史佐佐木高行昔日談」(大正四年刊)と、「明治聖上と臣、高行」(昭和五年刊)を利用できることは、せめてもの僥幸と思われるのである。津田茂麿は、高行が存命中、(七十四才―八十才)に口述筆記として天保元年より明治元年までの記録「昔日談」を書い

た。また、高行の死後、その続編として「自笑日記」「反古拾ひ」等を参考にしながら「臣高行」をまとめた。したがって、この題名にある「佐佐木高行日記」というのは、高行の著書「保古飛呂比」は当然だが、同時に津田の著書二冊も高行の日記に準ずるものとして含ませていただいたことを付記したい。

津田はその著「臣高行」の緒言に次のように書いている。

「侯は、明治維新より薨去前臨床されるまで、一日といえども日記を欠かせしことなし。その日その日のできごとを必ず記載して楽しみとせられたり。故に、その時代時代の観察を赤裸々に記録せられたり」(注7)と。

平凡な個人の日記でも、長年書き続けた資料は貴重なものである。まして、高行は、明治政界のまっ只中にあり、しかも晩年は天皇の側近として仕えた人物であるから、老大な遺稿はそのまま彼の業績の一部であった。だからこそ、皇室身边、および政府中央の赤裸々な記録がひきおこす波紋を考え、公開が阻まれたことはうなづけるが、前掲の論文で色川大吉氏が「明治政治史の研究上の第一級の資料」(注8)として大鼓判を押し、その非公開を遺憾に思われるのももっともなことである。著者、高行の立場からみても、その克明な記録が、後世葬られたままであることは残念なことであろう。こうしてみると、高行の偉業は、地下に埋もれた遺跡のように永遠に知られずにあるかもしれない。このことは、その人物が歴史上にその名を残したり、大衆の人気を博したりということと、その偉大さが、必ずしも比例するものではないことを物語るものである。

私は今、そうした彼の人格のみにスポットを当てながら、その生涯を

辿りたいのであるが、それは決して維新時における彼の功績を軽んじているためではない。そこでそのあかしとしても、また高行という人物のアウトラインを知る上にも、本文と多少重複するが、先ず多少なりとも知られている高行の活躍を紹介しておこう。

1 高行は、土佐藩の上士出身の尊攘派として、幕末期に藩内の保守派、公武合体派、勤皇党の間に立ち活動、中心となって藩論を倒幕にまとめた。そして、坂本竜馬、後藤象二郎らとはかり、大政奉還の建議を藩主に勧める画策を進めた。

2 国情の定まらぬ維新直前の動乱期に、対外的に微妙な立場におかれた長崎で、アーネスト・サトーにいわせれば「土佐の目付(検事総長と同じようなものだが、法律上の知識をもたない)という立場」(注9)で、相ついで起こる外人殺傷事件や、長崎奉行脱走事件などを、公正にしかも勇敢に処置し鎮撫した。

3 維新後は、主に新政府の司法にたずさわり、岩倉具視に従い欧米視察をなし、維新の法律選定に多大の貢献をした。

4 征韓論に破れた志士が多く下野する中、政府にとどまり、政府の専制、民権の急進に対して、両面批判を展開する一方、参議兼工部卿として、鉄道の建設、土木工事にも功をなした。

5 明治十八年、第一次内閣成立後は、政府の要職を去り、宮中に入り、明治天皇の皇子、皇女(大正天皇、常宮・周宮^{ちかのみや})の御養育に専念、明治天皇の厚い信任を受けた。

6 晩年は、皇典研究所長兼、国学院々々長にも就任、皇道文化の振興に尽くした。

これらは、高行三十才前後からの足跡であるが、こうした羅列はどうも皮層的な先入観を植えつける結果になりやすい。人の一生も、時代のあゆみもそうであろうが、歴史が記録として落ち着くまでには、議論百出、感情のあつれき等、長い間の迂余曲折の過程がある。その過程をバネとして、新しい時代の基盤は作られてゆくのである。

高行は、維新後、明治天皇初め高位高官の人たちに人徳を認められ、頭角をあらわしたものの、一面では「馬脚」とか「自笑」とかいうことばが示すように、自己の役廻りを自嘲的にながめることも多かった。日記に「自分ハ畢竟微力ニテ馬脚ノ役割ハ門口ナレ共、馬脚ノ働キナクテハ千両役者モ或ハ演技ノ妙ヲ施ス事難キ事多シ」(注10)とある。彼は、自分自身にそういいきかせながら、しいてそこに居坐り本懐を全うした。縁の下の力もちとして誠実を尽くした彼の仕事は、ともに活躍した他の志士に比べ世に盛名を駆せていない。しかし、そこにかえって、彼の不偏不党(それらを彼は「中正」ともいった)の人生観が伺える。

また、後述するように、彼はこの「中正」にすべてをかけ、手腕のある政治家というより、優れた人格の持ち主として生涯を送っていくのである。では、彼の人格とは、人生観とはどんなものなのか、我々は、まず、彼の生いたちから追究してみよう。

二、逆境と人間形成

(1) 動乱と貧困の時代

高行の生きた天保元年から明治四十三年までという時代は、幕末から明治への大きな転換の時代であり、動乱の時代だった。幼年のころは天保の大飢饉で餓死者が多く、一揆が続発し、別表(1)のように、天保四年、同七年の一揆と都市騒擾は、年間七、八十件にも達している。加えて、高行の少年時代は、仏、蘭、英、露が次々と日本の岸辺を叩いて、三百年の太平の夢をおどろかし、ついにアメリカの黒船来航によって天下は騒然、国をあげての危機に直面したのだった。時は、現代と全く対照的な、動乱と貧困のさなかにあった。動乱によって人は鍛えられ、死に臨んで人は命の尊さを知る。この意味からいえば、明治の怒濤をのりきった時代も、大戦の焰をくぐった時代も、人々にとっては僥倖だったといえるかもしれない。日本国中が緊迫し、貧困を極めたこの時代は、また不屈な人間を育成する豊かな土壌だったともいえるのである。

別表(1)

百姓一揆・都市騒擾
件数表

(天保元年~10年)

西暦	年号	百姓一揆	都市騒擾	合計
1830	天保1	19	5	24
31	" 2	28	6	34
32	" 3	20	0	20
33	" 4	56	17	73
34	" 5	20	9	29
35	" 6	12	2	14
36	" 7	67	18	85
37	" 8	40	13	53
38	" 9	20	3	23
39	" 10	10	1	11

日本歴史(中) 新日本新書 p.27

明治維新といっても、一朝一夕に理想の時代が到来したわけではなか

った。明治二年、大久保利通は、岩倉具視にあてて、「近ごろの訴訟を聞くに、王政復古をありがたいという文句なきのみならず、はなはだしきにいたっては、旧幕府の政治よりも困苦するという。このまま放置すればいかに離反するかもはかりがたい」と、書いていたという。(注11) 明治政府ができて、重税が続く中で、人民のあえぎはおさまらず一揆は頻発した。別表(2) 安政二年から明治七年までの二十年間の農民一揆をみると、特に慶応元年から明治七年の十年間にかけて急増し、中でも幕末から明治初頭にかけてそのピークに達している。

別表(2)

農民一揆件数表
(安政2年～明治7年)

西暦	年号	件数
1855	安政 2	13
56	3	15
57	4	11
58	5	24
59	6	14
1860	万延 1	32
61	文久 1	19
62	2	10
63	3	15
64	元治 1	17
1865	慶応 1	28
66	2	71
67	3	31
68	明治 1	79
69	2	110
1870	3	62
71	4	52
72	5	30
73	6	55
74	7	21

日本歴史(中)
新日本新書
p. 51, 67, 81, 93

貧困は庶民のみでなく幕末の諸藩も同様、大身の旗本すら内職せねば食べられないというから、まして下級武士の家庭はひどいものである。そうした苦境と混乱をのりきり、ともかく日本統一国家体制を形成したのは、我々の曾祖父、明治の人たちなのだ。高行もまたその敬愛すべき明治人の一人だった。

(2) 下級武士の家に生まれて

佐佐木高行は、禄高百石の土佐藩上士、格式は扨從組、別表(3) 佐佐

木高順の嫡子として、土佐国瀬戸村で生まれた。幼名は、弥太郎、松之助、万之助、初名を高富、高春、成人後は通称三四郎といったが、ここでは実名「高行」に統一して書くことにする。

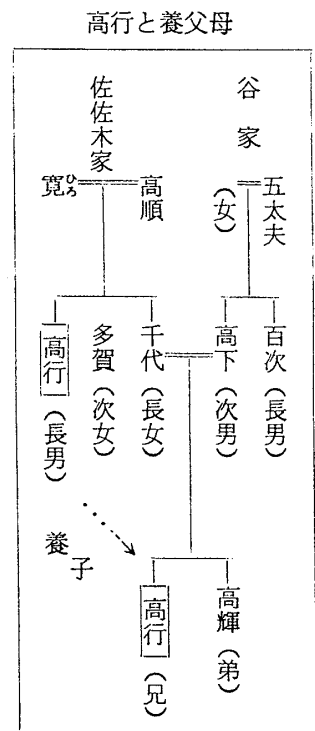
実父、高順は、先祖伝来の鎧もそのままでは着用できないほどすこぶる身体肥大であった。「性質はいたって謹直、先祖書その他大切な書類をみる時には必ず手をすすぎ口を清めた、」(注12)という人柄であったそう。別表(3)

土佐藩の階級(文久年間)	
家老・中老・物頭・相伴格(医師)	馬廻 新馬廻
扨從組・留守居組	白札 郷士 徒士
以上 上士	以下 下士

昔日談 p.164~166

しかし、彼が胎内にある時実父、高順はすでに病死していたのでまもなく実母、寛は、高行の姉、千代(高行より四才年長)に婿養子として、谷潤三郎、高下を迎え、彼の養父母とした。当時、高下は十七才、しかも病身であったから、姑と子供ら三人(高行には千代の他にもう一人姉がおり当時まだ二人とも幼なかつた)を養う実質的生活の維持は、殆んど実母、寛ひとりの肩にかかっていた。別表(4) 父の死後、相続なきため、藩法により三十石を減せられた佐佐木家の家計は、養父の医薬等の出費もかさみ、惨憺たるものだった。幼い高行は、実母の内職でたまに玩具を与えられる程度だったという。

別表(4)



そんな中で、高行を人間づくりの文武修業にかりたてたものは何だったか。それは、武士の家系に流れる誇りであり、気概であり、志だったといえよう。佐佐木家は代々土佐藩士山内家の家臣で、扈從組であったが、「曾祖父は破格の抜擢で御金奉行に」「祖父は婿養子だが、学問も槍も達人」(注13) だったと高行は昔日談に語っている。実母、寛は、二百石の馬廻組、斉藤内蔵太の姉で、一人息子の高行へかける期待の大きさが、ここらにもまた伺えるのである。

封建社会にあって、士農工商という身分制度は、いかに豊かな才能を受け継いでいようと、世襲の厚い壁で行く手を遮る例が多かったが、逆に、武士の家柄でさえあれば、いかに貧しくともおのずと奮い立たずにはいられない「誇り」をもつことができた。高行が貧乏士族ながら、不屈の闘志を生涯燃やし続けることのできたのは、この家系への誇りがバネとして作用したからであろう。そして、それに一層拍車をかけたのが、養父となった潤三郎「高下」の存在だった。

高下は、山内豊資公の御祐筆、谷五太夫の次男だった。土佐藩で谷家

(注14) といえば、南学を伝えた儒者の家柄をまっ先に思い浮かべる。その辺の記述は特になが、高行の人格形成にとって、この南学思想を背負っていると思われる養父の影響は絶大なものがあつた。

高行が四才の時、養父、高下は文武の修業にも不便であるし、独立にもさしつかえるということで、一家こぞって瀬戸村から城下町高知へ出ている。まだ若い養父(十九才ごろ)がそれなりに青雲の志をもやしていたことが想像できる。

「自分の養父は極めて正直な方であつたけれども、俗にいう一酷者で、子供などもモウ恐れをなしているくらいであつたから、母の苦勞というものは一通りでなかつた」(注15)

この母というのは、当時まだ十五才ぐらいの養母、実は高行の姉、千代のことであろうが、朝夕夫の威厳におびえながら、夫に仕え、家を守っている若い日本の妻の、典型的な家庭風景が想像される。たとえば家計は火の車でも、たとえ病弱な夫でも、彼は一家の大黒柱として、そのはげしい気性で家族を支配下においていた。それにしても、この養父、高下のひきおこした陰惨な事件は、高行の人生観に抜くことのできない深い楔をうちこんだにちがひなかつた。

その事件は、天保六年五月、高行が六才の時におこつた。

「天保六年五月、是月二十四日、夜半父上ノ御実兄、谷百次様御病死、実ハ百次様ハ兼テ過失コレアリ、屋敷内牢中ニ在リシニ、父上忠告シテ自殺セシメシナリ、百次様御自殺後、父上毎度夜半、潮江山へ御墓参相成、夜半碌々御快寝無之コトハ幼ナ心ニ相覚エ心配致候事」(注16) かわめて正直一酷者の養父が、座敷牢にいる彼の実兄を自殺にまで至

らしめた過程には、どのような理由があったかはわからない。しかし、正直、実直なだけに封建道徳の掟は、より苛酷に、より非情に彼を縛りつける結果になったことは想像できる。そしてその結果、二十一才の養父は、兄を死に至らしめた自らを責め、每晚山中の墓に、ただ一人、ちようちんを頼りに出かけては悪夢に苦しめられている。

その一と月後、天保六年七月一日、六才の高行は表面十五才というこ
とにして、藩主、山内豊資公にお目見得する。これは藩法によると、相
続する子供がお目見得しない内に親が死ぬと、禄が減るといふきまりが
あり、現に佐佐木家はその苦渋をなめていた上、不幸せが続いたので、
公然の習わしに従ってそうしたのだという。ところが、世間ではこのよ
うな時、親類同伴し、種々心配するのに、養父は深く考えた末「一人モ
伴ハズ御城中ニテモ、態ト父上姿ヲ隠シテ、挙動ヲ試ミラレタルニ、恐
レ憚ル色ナク、平常ノ通りニアリシトテ」(注17) 大いにほめてくれたと
いう。高行の自主独立の気概は、その後も随時に行われた養父の教育方
針によって培われていった。

恐ろしい事件より一年たった天保七年、養父はついに発狂した。

「天保七年七月、是月中旬、父上御発狂ノ御模様、甚ダ心痛致シ候
事、未明、中庸御読書中、不図脇刀ヲ以テ御面上へ疵付ケ、其音ニテ
一同驚キ大騒ギト相成リ、自分幼少ニ候エ共、不取敢親族市村太郎右
衛門ニ馳セ行キテ右ノ次第ヲ申シ述べ夫レヨリ親族ハ使ヲ馳セ、追々
集リ来リ、交代ニテ親族中番致候、追ッテ、屋敷内へ牢囲屋ヲ作り、
其中へ御慎ミ相成候、兼テ困窮ノ処、御病発ニ付、愈々困難ニテ、鎧
二領ノ中、一領売却、番具足一切其他諸道具売払ヒ、尚又親族ヨリ少

々ツツ出金ニテ、借金等ノ始末ヲ付ケタレ共、皆済ニ不致由ナリ(中
略)

又、父上ノ囲ヒニ御入りノ時、雨天ニテ、御手ハ自由ニ不相成様
ニ、親族ヨリ用意致シ候コトニテ、他ヨリ雨傘ヲ差掛ケテ、御歩行ノ
御模様、悲シキ限りニテ、能ク取成サバ、如此セズ共宣シキ事ナラン
ト落涙セリ、皆々ヨリ色々慰メラレ、只々御囲ヒノ外ニテ、御気嫌ヲ
伺ウ而已ニテ、中々ニ心細キ事ナリ」(注18)

七才の高行が、この事件の渦中において、幼いながら親族へ知らせに走
る。その胸の鼓動さえ伝わるような事件であるが、高行は、「昔日談」
では、もうこれに触れていない。このことは、それだけ高行にとって、
いまわしく悲しく繰り返し語るに忍びない事件だったのでないだろう
か。

時代の道徳律の中で、実兄を死に追いつめた若い養父は、こうして自
らをも責めて狂気となり、自殺をはかり、兄同様監禁の身になる。手を
しばられているので、雨傘をさしてもらいながら囲いに入れられる養父
を見つめる幼い高行のかなしさが、「中々ニ心細キ事ナリ」という述懐
にいたいほど伝わってくる。それは言葉に表わし難いほど深い人生の悲
哀を幼い高行の心に植えたことであろう。人間の生命を賭してまで
して、養父が守ろうとしたものは何だったのか、子供心に高行は、武士
には生命以上に大切な「律」があることを感得したのではあるまいか。
そして、この体験は、成人後の高行の生き方を決定づけたものではあるま
いか。後年、土佐藩や明治政府の役人として勇猛果敢に活躍する高行
が、いかなる事態にあっても決して節をまげず律を守ったのも、心に刻

まれたこの体験が、彼の心に寸分の妥協をも許さなかったためと思う。また一方、そんな中でも肩を寄せ合って生きる家族の真実の愛情が、高行の人格の基盤をつくったことも見のがせない。

こうした状態の中で、一家はますます貧困に追いつめられ、やむなく、諸道具を売却したあと残された伝来の鎧一領、番具足一切をも手放さなければならなくなるが、七才の高行は、この時、やがて成人しご奉公の暁には、「必ず買戻スベシ申述ベテ親族ヨリ褒メラレタリ」(注18)と記されている。養父の気概を受けついで幼いながら闘志を奮いたせているのである。

前述のように、天保七年といえば、大飢饉により一揆がピークに達した年で国内は大混乱に陥っていた。当然のように翌年二月には、大阪で大塩平八郎の乱が起きたことを高行は伝え聞いた。それについて彼は、「幼心ニ面白ク頻リニ軍ノ有ラン事ヲ楽シミタリ」(注19)と記している。これは、彼の前後の事情から推察する限り、戦争遊びをおもしろがる八才の子供の言葉とのみ言えないと思う。それは、極限の生活苦にあえぐ下級武士の家庭で、当時の膠着した封建社会からの脱皮を子供なりに夢みていたことの表われと思われる。後年に、彼が、抬頭する尊皇思想にいつそう強く結びついてゆくのも、儒学者、平八郎の命とひきかえにされたこの事件が影響を与えていることは確かだろう。

天保八年七月は、養父発病後一年を経過、「追々御全快ニ相成リ嬉シク悦ビタリ」(注20)と記されている。天保九年、養母、千代に女子が誕生した。ところが、翌十年五月早世、十一年八月、今度は男子が生まれたが、またまた四日目に早世、一家の相続く不幸にせつかく全快した養

父の病気の再発が気づかわれる日々を送っている。そのため、若い養母は、養父には特に、「聊ノ事モ御氣ニ掛ケ、御食物モオ撰ミ、魚類ニテモ真魚(鯛の類)ナラデハ御用ニ無之、困窮中大ニ困却、曾祖母、祖母上、色々御内職ニテ取続きの有様ニテ実ニ心痛ナリ、幼年午ラ夜モ碌々快寝セザル事アリ」(注21)と、書かれている。いつ落ちるか知れぬ雷鳴の如き養父に、一家が息をつめながらも「御六ヶ敷ハ畢竟御病症ノ故ナリ」(注22)として、気をつかっているのである。そして、そうした中でさえ、養父は「至ツテ御実直ナレバ、自分ハ御実子ノ如ク御愛顧ハ深カリキ」(注22)と、述べて些かも親子の愛に亀裂を生じていないのは、養父、高下の徳もさることながら、武家の家風を受け継いだ女たちの蔭力の大きさを感ぜさせる。家庭を吹きぬける数々の嵐を家族がいかに処するか、それは万巻の書にもまさる幼時期の教育であった。曾祖母・祖母、寛・養母、千代この三人の女たちの忍耐と配慮が、佐佐木家の嵐を高行にとって至上の教訓に変えたといっても過言ではないだろう。

こうした不幸と貧困の続く中で、文武の道だけは武士のつとめと、高行は八才のこの年、柴田敬吉という師匠の所へ手習いに行った。しかし、ここは大身家の子弟が多く、皆若党を供にして連れてゆくのに、高行は大抵一人で出かけるため、ひどく軽蔑され、「何んかという気で憤発した」が「どうにもならず十才頃で止めた」(注23)と、その子供の悔しさが語られている。

天保十年、十才の時、養父の従弟、沖助市(十六才)が、「百姓無礼ヲシタリトテ手打チニ致シ候」という事件が起こる。その時、高行は、養父

が沖家へ行っている間に、一人で十四、五丁離れたその場所へ出かけてゆくと、寺の前の田中の細道に、百姓が切り倒されていた。「其夜父上帰りて色々咄^{ハナシ}ヲ聞ク、武士ハ腰ヲ抜カス時ハ生甲斐ナキ事ナレバ、幼年ニテモ負ケルコトハ成ラズト励マサレ、大イニ憤発セリ」(注24)と、養父のことばを深く心に刻んでいるさまが察せられる。

かくも愛情深く、身内同志いたわり合っている家庭にありながら、事、農民の死に対し、こうも平然としている心境はどのように解釈すべきなのか。士農工商の身分制度が長年肌身にしみついたこれが武士の平常の心情なのか、家永三郎氏によれば、「人命を断つことを武士が全く日常茶飯事としていたのは、武士が、戦鬪によって自らの生命を軽んじ、また、敵の命を断つことを職業としていたからだ」という。

(注25)

高行の場合も、武士には、命にかえても守るべき律があることを幼時より知らされ、ある覚悟があったのであろう。養父やその兄が、命と同一位においたその武士の面目を、百姓風情にはかにされて黙ってはおれぬ。正確に言えば、それは農民蔑視というより、福沢諭吉のいう「農民の」封建百千年来の余弊」として「先き次第で驕傲にもなったり柔和になつたりする」(注26)精神の卑屈さへの蔑視であった。自害のための刃は、同時に切捨御免の刃でもあった。高行が何ら同情を寄せることもなく、この現状を凝視し、養父のことばに大いに憤発した気持ちは、いわばそうした己れの死とも隣合わせの倫理観にあった。彼の人格の基盤はこうして次第に固められていった。

武士を頂点とする階級制は、幕末期、庶民の目覚めによって各地で崩

壊し始めたとはいえ、浸透した武士階級の倫理はそう簡単に消し去れるものではない。維新の志士たちがあれだけの活躍ができたのも、上級士族には既に退化しつつあった倫理観が、下級武士にはしっかりひきつがれ保持されていたからであろう。下級武士の倫理は、絶対権力の上にあぐらをかく上級武士の怠慢もまた許せなかった。その意味で、幕末期は、上級武士が下級武士の精神力により、とってかわられた時代ともいえよう。高行はその過渡期にあって、ひきついで前代からの倫理観を、何とか新時代の精神的支柱にしようとする模索した人間のひとりだったといえる。下級武士の家柄に生まれた時代的宿命を思う時、高行がそのまま近代の平等思想に適合し得ないのも無理からぬことと思う。

(3) 立志と修業

いつの時代においても、人間づくりは重要である。封建時代においても、他藩に先んじるため、各藩はそれぞれ藩校をつくり、特に武士の子弟教育に力を入れた。武士の子弟もまた天下を率いる大志を抱いて修業に励んだ。「大隈伯昔日譚」によると、それは次のように書かれている。

「余が郷里たる佐賀藩には、弘道館てふ一大藩校ありて(中略)今の小・中学の如く、一定の課程を設けて嚴重に之を督責したり。藩士の子弟にして六、七才になれば、皆外生として小学に入らしめ、十六、七才に至れば中学に進みて内生となり、二十五、六才に至りて卒業せしむ程度なり。若し其適齡に及ぶも、猶、学業を成熟する能はざ

る者は、その罰として、家禄の十分の八を控除し、且つ藩の役人となるを許さぬ法なりき」と。(注27)

教科書は専ら四書五経であり、朱子学であつてこの鑄型にはめこむことが、幕末藩校の方針だったようである。これは、明治を経て終戦前まで尾をひいた学制における一種の思想の統制でもあつた。

土佐藩にも致道館(文久二年)開成館(慶応二年)以前に、藩校に当たるものがあつたと思われるが、佐佐木家の経済状態はそれどころではなかつた。十才で柴田敬吉の寺小屋をやめた高行は、その後、隣家の軍書好きの年長者と、太平記などに熱中するが、その本は教授館(豊敷公の頃建てられた所謂藩校のようなもの)からひどく待たされては借りてきたと、その不便だったことを回想している。「一度ニ、五冊宛ナリ、取替ニ行キ候テモ手間取シ、又ハ先ノ分ヲ他へ拝借相成リ候時ハ差支ヘ候」(注28)十二才ごろからは、軍書ばかり読んではいられぬと、大町善七(桂月の縁者)に四書五経を学んだ。八才の時、書物を買えず、教授館から借りて筆写して読んだ、その写本の四書五経は今も保存されているといわれる。(注29)

高行の家が貧困の故に、まともな藩校の教育課程を踏めなかつたことは、一律的思考のわくにはめられなかつた点で、かえって彼に幸いしたのではなからうか。彼の誠実一図、衆目を省みない進言の気魄はそのように感じさせるのである。

「父上、文学ハ好マレズ武芸ハ好マレ夫レ故一般ヨリ早ク入門セリ」(注30)と、あるように養父の影響で高行は、幼いころから武術を学んだ。剣術、槍術、兵学、馬術、弓術等一通りの基礎を元服する十五才ま

でにしまれてゐる。

が、いつの時代にも低俗な人間はいるもので、「馬術入門致シ候処、馬役ハ一体風儀悪シク候テ、弟子ニテモ大身ノ人ニハ贈物モ多ク、時々馳走等不致テハ、能ク稽古出来ズ、自分等ノ小身且ツ貧窮ニテハ不面白事ニテ、修業セズ止ミタリ」(注31)と、後述している。しかし、この事件にせよかつての手習いの時のことにせよ貧困のため体験したこの屈辱は、高行の正義感を高めこそすれ、卑屈にはしなかつた。このことは、高行の背後にいつも一本筋の通つた家庭教育が温い励ましを送り続けていたことを物語るものである。

成人した十六才の年、母方の斉藤の叔父が江戸へ行ったため、一家こぞつて留守宅、高知の永国寺町へ移転した。十七才の時、儒家、岡万之助に五経の素読を受ける。当時、高行は、家に小学内外篇・中庸・玉篇位しかなく、実母、寛が「この叔父が江戸表から送ってくる小遣錢をためては本を買ってくれた」(注32)ことが、何より嬉しかったらしい。永国寺町へきてから、交際範囲も広くなり、従弟の原平三郎らと軍書輪読会や漢籍の会読をしたりして激論をたたかわす。高山彦九郎を尊敬する平三郎との交際は、高行の勤皇思想に大いに影響を与えている。

また、養父は十六才の高行に、はやくも一切の家事を任せただけで、彼は借財にも頭を悩まさなければならなかつた。「獅子は子を千尋の谷に落とす」とはよくいわれる諺であるが、少年期の人格形成にとって、苦境から学ぶものがいかに多いかは、今日痛切に感じるところである。愛情と逆境が、人格の陶冶に不可欠な条件であることを知ってか知らずか、養父、高下は、高行にとって、最高の教育者の条件を満たした存在

であった。

「当時の書生は、悠長に本を読んでいるばかりでなく、多岐にわたる文武修業の上に、公私の勤めをもち、親族の吉凶、年忌の寺詣、米搗、薪割、屋敷内の掃除など一通りではなかった。そのせわしきの中をぬいながら文武に励む」(注33)のが若者の常だったのである。

このようにして身につけた学問であったからこそ、机上の空論ではすまぬエネルギーを内蔵していたのであろう。彼の人格の基礎は、ほぼこの頃までに固まったと思われる。

(4) 赤貧と動乱の中で

高行の前半生は、貧困にどっぷりとつかりこんだ生活の連続だったが、結婚後はますますその度合いを強めてゆく。その洗うが如きといわれる赤貧の中で、志を立てて文武修業を怠らず、また、家庭を省みることとまもないほど国事に奔走している。家庭中心の殻にこもりがちな現代人には、そのさまはまさに奇異としか受けとれないほど、時代は遠く離れてしまっているように思う。それほどにまでして尽くすべき大義が現代にはあるだろうか。

弘化三年十二月、高行は十七才で縁組、翌年四月離別、が同年十二月再婚し、嘉永二年二十才で女子を授かっている。が不幸にしてこの結婚も同年破れ、嘉永三年四月結婚するも又同年十二月離別、これについて日記には、「実ハ家政頗ル困難に立至リ、且家内ニ不可言事情有之、本妻

ハ是迄三度離別」(注34)としか記されていない。家庭にいうことのできない事情があったとは何を意味するのか詳かにされていないが、当時の佐佐木家がいかに貧困だったかは想像できる。

しかし、こうした家庭の内情にもかかわらず、高行はますます文武修業に励んでいた。真逆の時に役立つためには、他流試合でなければだめだと、さまざまな流儀の相手を求め、城下各道場を巡修する一方、鹿持雅澄について国学を学んでいる。鹿持雅澄は、あの「万葉集古義」の大著述をなしとげた全国的に著名な土佐の国学者であったが、高行が特にひかれたのは、自分と似たような貧困で子供を抱えている境遇にあったと思う。鹿持の偉大さは、わが身とひきくらべる時、どれほど高行を叱咤激励したことであろうか。彼は、その畏敬の念を、日記に次のように述べている。

「嘉永四年七月下旬、鹿持藤太へ国学入門致シ候事(中略)鹿持先生ハ若年ヨリ国学ニ目ヲ晒シタルニ頗ル貧窮、且男子兩人出生ノ後夫妻ヲ失ヒ、老父ハ酒ヲ好ミタルニ必ズ毎夜貧困中ヨリ老父ニ酒ヲ飲マセタル由、日中ハ家事并ニ子供ノ養育ニ従事シ、皆々寝ニ就ク頃ヨリ、毎夜徹夜読書セリトゾ、万葉集古義其他著書モ数多アリ、頗ル唸弁ナレドモ筆ヲ執レバ大ニ意志ヲ述べ尽シタリ、自分共入門セル頃ハ、万葉集古義ノ修正中ニテ、其修正ヲ傍ニテ聞キ学ビタレ共、何分不才ニテ同学友ニ及バズ、渡辺飯沼ハ進歩セリ、同学中最下級ニテ学ビ得ザルハ自分一人ナリ」(注35)

自分の微力を恥じることの深ければ深いほど、高行の学びとるものは大きかったであろう。短期間であったが、このよき師にめぐり会えたこ

とは彼にとって好運なことだった。

翌、嘉永五年八月、二十三才、高行は矢も楯もたまらぬような思いで江戸へ念願の武者修業に出る。途中、湊川の楠公の墓参、伊勢の大神宮の参拝等を兼ねるのも勤皇への誓いを新たにするためだったろう。十月に江戸に至る。そして羽倉外記、斉藤拙堂、藤森弘庵、佐久間象山などの門を叩くが、象山にはその峻厳なる容貌その非凡なるたたずまいにいささか恐れをなして入門を見合わせている。

高行は旺盛な好奇心によって、この武者修業により大いに見聞を広めることができた。しかし、ここでも我々は彼の背後にある祖母、寛・^{ひろ}齊藤叔父の熱い愛情と激励を感じないわけにはいかない。「以前ヨリ江戸へ修業ノ志願有之候処、貧窮ニテ出来ズ、此度無理ニ借財シテ、一ヶ年ノ筈ニテ出足ス、江戸著相成候ハバ、兼テ祖母上（実ハ御母上）へ齊藤御叔父上ヨリ、一ヶ月式朱ヅツ小遣参り候間、夫レヲ宛ニシテ参リタレ共、長ク続カズ、翌春帰国ス」（注36）これをみても家族の人々が、いかに苦面してこの文武修業を達成させるべく努力したか、またいかに高行の願いが強かったかがわかる。それは、後の藩命による度々の出府とは全く異質の個人的な重みをもっていた。考えてみると、彼が次第に重要な立場に身をおくようになるのは、度々の藩命による江戸出府なのであるが、その突破口をつくったのが、自費による苦面の江戸修業だったともいえるのである。貧困の中を支援し続ける身内の愛情にこたえるべく、感謝の念が高行の日々を充実させたのであろうと思うと、この修業は、短期間とはいえ、大きな意義をもっていたと思う。

江戸から帰って二た月もたたぬあわたしさの中で、嘉永六年四月、

二十四才の高行は、四度目の妻、貞衛を迎えた。高行の結婚は、常にことうした多事多端の中で行われているのである。さかのぼって言えば、二度目の妻との結婚生活の折は、嘉永元年六月以来、相続く山内家の計報があつて、年も押しつまり、容堂公が相続されるまでは落ちつかず、三度目の妻には、先妻の赤児の負担と耐え難い貧困が待っていた。日記にはそのころの窮状を次のように記している。

「嘉永二年七月、妻（原増右衛門長女）不縁ニ付離別、但シ家事困窮中離別、女子養育上十分ナル乳母召遣ヒ候事出来ズ、貫ヒ乳或ヒハ摺粉等ニテ世話致シ、殊ノ他難儀、祖母上専ラ御世話相成候、自分モ夜中等ハ幼児ヲ抱キ、入魂ノ家へ乳ヲ吞マセニ連レ行キ、又ハ摺粉料ノ白砂糖ヲ五、六丁程ノ廿代町ニ買イニ通フ貧窮ナレバ少々宛、毎夜ノ如クニ、求メテ買求メ候金銭ナク大ニ困リ候事屢々有之候ナリ」（注37）

二十代の志に燃える青年が、赤子の泣き声に途方にくれながら、貫い乳にまた僅かばかりの砂糖を求めて毎夜走り歩くのは、どれほど切ないことであつたらう。「大ニ困リ候事」には、すっかりもて余し困りきっている高行のため息がこめられている。その困苦から何とか脱出しようとしたあせりが、便宜的な結婚へ走らせ、またまた失敗を招いた。重なる失敗は、急を告げる国情、藩情、家庭の事情にせかされて、女房の選択への慎重さを欠いた結果ではなかつたらうか。

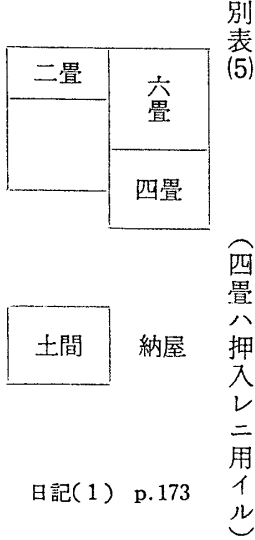
が四度目にしてついに終生を共にする妻、貞衛とめぐり会えたことは、高行の生涯の大きな幸運だった。なぜなら、貞衛は、晩年高行と共に、高輪御殿に移り、二皇女御養育の重任まで果たされた賢夫人だった

からである。明治天皇より勲二等に叙せられ、「実に日本女性の亀鑑とするに足る」(注38)とまで讃えられた理想の女房だった。

貞衛と結婚し、いくらかほっとした二ヶ月後、米艦が浦賀へ渡来、開国を迫った。日本国中物情騒然、土佐藩も西洋流砲術などを開発、外敵に備える気構えをみせる。そして、翌安政元年、米艦の再来に当たり、高行は臨時御用として藩から江戸への派遣を命ぜられた。このころ、佐佐木家も百石に増俸、長いトンネルの果てに微かな光がさすかに見えた。そして、江戸へ出た機会を利用、兵学、儒学を修めた。

ところが、それもつかのま、高行が江戸へ出ていた安政元年十一月、日本は全国的な大地震に見舞われた。特に土佐の被害はひどく且つ高潮さえ加わり、潰家、流失、焼失の惨状を呈した。年改まって帰国、転居した高知、杓田村ひしやくだの家の窮状は、「まさに極貧にして、家洗うが如し」(注39)と言われるほどこれまでの貧困をさえしのぐものだった。

日記の図解別表(5)によれば、六畳と二畳というこの杓田の家は左のようである。



「右家二十人居住、畳ナクシテ席敷ナリ、父上ハ土間へ根台ヲ上げテ御住居、其困窮甚シ」(注40)

安政二年十二月の記録には、借金の催促にきた者が一泊、養父は家事を知らず酒を出せといわれるが、家の中には一銭もない。あちこち借金を頼んでは断られ、ようよう親切な小質屋の嫁に小銭を借りて買物をする様が、次のように記されている。

「酒・醤油・豆腐ヲ少々相求メタリ、徳利モ無之、皿ヲ借り醤油ヲ入レタルニ、七、八丁ノ田道、殊ニ寒気ニテ氷モアリ、甚ダ難儀、漸ク笹ノ葉ヲ入レコボレヌ様ニ致シ帰リタリ、右四匁貸シ呉レ候時ハ嬉シキ事所謂鬼ノ首ヲ得タル心地ス、極貧ノ身程悲シキハナシ」(注41)

味噌を買うにも金がなく、三文以上買った事がないため「佐佐木の三味噌」といわれ、醤油を買うにも容器なく時には里芋の葉に入れるとというような貧困を、(注41)高行は、彼の人格の中にどのように咀嚼したのでらう。「極貧ノ身程悲シキハナシ」という率直な感情の吐露は、彼の人格の高傑さがそのため少しも損われなかったことを証明するように澄んできこえる。

こうして安政三年四月には、ついに逼塞願を出すまでに至った。

「安政三年五月十八日、逼塞入ハ借財ノ拂方出来ズ不得止御作配相願ヒ候事ニテ、遊慰ハ勿論、他出之節モ袴羽織ヲ著スルコト不相成、勤事向ハ一切セズ、所謂閉居ニ有之候、尤モ文武修業ハ構無之候得共、孰レモ修業等ハ不致、自分ハ無袴無羽織ニテ往来致シ、文武修業致シ候、他人奇トス、

借財高多ク、凡ソ四拾ヶ年ノ後ニ皆済ノ筈、依ツテ終身閉居ノ覚悟ナレ共、御祖母上・母上御窮屈ノ御暮シニテ、御余命モ多カラヌ事ナレバ、甚ダ以テ御氣ノ毒ナリ、又子供モ何ノ遊慰モ出来ズ、肩身狭キ

事ニテ、是ニハ心ヲ痛ムルナリ」(注42)

高行は貧困の中で専ら祖母、寛・養母、千代、そして子供たちを思いやり、自分の前途への不安は些も述べていない。それどころか、体裁をのりこえ、奇人といわれながらも文武に励んでいる。その心がいかに愛情深く、その志がいかに強かったか、我々は敬意を抱かずにはいられない。幼年時代より貧困に耐えてきた彼を齡三十に近づかんとする時に至るまで、天はなぜまた執拗に追いつめるのかと思う。

しかし、時局は彼を逼塞せしむるにはあまりにも多事であり、藩では人材に事欠いていた。同年九月には、高行は操練御用の藩命を受け、再び江戸へ赴くが、井伊直弼の弾圧にまきこまれ、翌年六月は調練役を罷免、その後、二年もの間土佐に逼塞する。高行が三たび江戸に赴くことになるのは、万延元年、桜田門外の変に対する臨時御用の派遣であった。万延元年には、福沢諭吉らの遣米使節派遣があり、文久二年には公武合体の和宮降嫁があって世の中はめまぐるしく廻った。帰国した高行は、吉田東洋の計画建設中の文武館の調役となるが、まもなく大病(悪性の肺炎)にかかり、およそ十か月近く陋屋に臥床。

この間、よく知られている吉田東洋対武市瑞山の衝突は、土佐藩を二分するほど激烈を極めた。高行は、両者の間に立ち、藩内の意見をまとめようとするが、こうした一国一藩の浮沈を前にしては、高行一家の貧困や病患などたるにたらぬ小事であった。それは昔日談で回想されているように「殺氣充滿せる世の中」「殆ど危険なことばかりで」「地位など顧みる違などなく」(注43) だれもが命をかけて困難にむかい、天下を論じていた時代だったのである。罷免、左遷、果たし合い、危険な峰が周

囲をとりまいていく時代だったのである。

こうした中で、高行が三十五才の元治元年に、彼に最も大きな感化を与えた養父、高下は、新時代の曙光の中で時を得て活躍する高行の姿を見ずに、五十才の生涯を閉じてゆくのである。

養父の死後も長く高行の心に、彼の面影は消えなかった。それから五年経た明治二年、養父の実子「高輝」が初めて上京するに当たり、高行は毎晩養父の夢をみている。多忙な仕事の中にありながら、養父や弟に對する高行の心づかいが感じられ、養父がいかに深く高行の心に入りこんでいたかがわかる。

「明治二年五月四日、高輝事去月十三日、御国許出足、別役富次ヲ伴ヒ本日無事著京ス、因ニ云フ、高輝出足ノ夜ヨリ、東京着ノ前夜迄、養父上ノコトヲ一夜モ不欠夢ニ見上ゲタリ、如何ニモ不思議ニテアルナリ」(注44)

おそらく高行は、かつて幼い自分を見守ってくれた養父に感謝しながら、弟、高輝の身をおかすの養父と同じ心境で案じていたことだろう。

ところで、あれほど貧窮の悲哀を味わった高行の体験は、政治にどのような生かされたであろうか。色川大吉氏は、「高行日記に百姓町人の動勢がただの一度もあらわれてこないこと」(注45)を驚かれ、これが「佐佐木ら尊攘派の人民觀を示している」(注45)と、指摘しておられる。高行が一凶であればあるほど、幼時より植えつけられた封建道徳は根深く、それは赤貧の体験などでは、強固にこそなれ、取り除かれるものではなかった。ただその体験が、彼を心情的には、他人の痛みのわか

る人間に成長させたことは確かである。東北地方の視察記録、「奥の雪みち」は公開されていないが、後に、彼がそうした東北庶民の苦情のきき役に朝廷から抜擢されたこと自体が、既にその人柄を買われたことにはならないだろうか。

慶応二年二月、土佐藩の財政たて直し対策として、後藤象二郎らが一策を案じ、「産物ヲ起シ、富国ノ基礎ヲ立ツル為ニ開成館ヲ建築ス」(注46)という趣旨で、人民に御用金をかけようとした。その時、高行は、「未だその事業に着手せざるに人民に御用金掛ケ開成館ヲ建築し、民の疾苦を厭ハざるハ不可なり」(注47)と、執拗に反抗、そのため、御郡奉行と御普請奉行を罷免されている。

また、明治十三年、今度は高行が三大臣に出した財政建直しの建白書では、

「願ミテ下民人ハ物価ノ騰貴ニ苦シミ、父母妻子泣飢、朝夕ニ其ノ夕ヲ謀ラズ、何ゾ独リ官吏ノミ華麗ナル邸宅ニ住シ、栄耀安楽ヲ極ムルノ不人情ヲ為スベキ理アラシヤ」(注48)と、迫っている。

高行は四民平等の庶民観をもつには、あまりにも深く武士の倫理を植えてつけられていた。貧困に対する気構えでも、武士と庶民では大きく隔っていたように思う。武士の方は、「食わねど高揚子」の川柳や、「武士道はやせ我慢の哲学」といわれるように、精神力ではねつけようとする意地があった。しかし、階級的に軽んじられている庶民には、そんな虚飾的な気どりよりも、実質をかちとろうとする行動力だけがあった。目覚めてきた庶民の一揆はそれを示すものだった。この違いでいえば、高

行は全く庶民性のない心情の持ち主だったといえよう。

彼は庶民と同等の位置に立ってではなく、庶民より一段高い立場に立って彼らをひっぱってゆくのが為政者の責務だと思っていたのである。その意味で、政治のあり方をできるだけ庶民の味方になり推しすすめるため人一倍努力した。庶民の苦しみを省みず、私腹をこやすなど最も恥ずべき行いだと思っていた。その高傑な理想を、終生貫いた不屈な反骨精神こそ、彼が赤貧からかちとったエネルギーだったのである。そしてそれはまた、動乱と貧困に耐えた明治人に共通する気骨でもあり、現代の一億総中産階級を自負する日本人が喪失してしまったエネルギーでもあった。

三、「中正」を軸とした活躍

佐佐木高行の明治維新に果たした業績は、後世どれほどの意義があったか、それについての論説は極めて少ない。ということとは、歴史家たちにはあまり意義を認められていないということなのだろうか。歴史は多くの人々の長年の血と汗でつくられるものであるが、記録に残る人物はその時代の立役者だけである。しかし、もし我々が真に歴史を理解しようとするなら、舞台の裏にあって時代を支えた人物にも目を向けるべきだろう。それは、階級・職業を問わず、人々に感化を与える強靱な精神力、高傑な人格の持ち主が多いのだ。佐佐木高行もその一人だった。

高行の活躍は、一貫して「中正」のためにあった。「中正」ということは、明治十四年、高行らが民権主義に対し、皇室を中心とした立憲政体を樹立するため、「急激ニ走ラス、姑息ニ流レズ、中正不偏ノ主義ヲ以テ團結シタ」(注49)という、その「中正」からとったものである。しかしこれは政治的理念というより、高行の一生を貫く人生の姿勢であった。これについて歴史学者、渡辺昭夫氏は、

「佐佐木が明治政治史のいわば劇中の観察者たり得たのは、情実と情実とのからみ合いや利害の衝突というものから一步距離をおき、いわば自分を『中正化』することによってであった。言いかえるならば、不偏不党の立場に自らをおくことによって、政治の中枢に近く位置しながら、しかもその渦中に巻き込まれず身を処することができたのである」(注50)と述べておられる。

激烈な時代の波をくぐり、気性の激しい養父と、その日の糧にも事欠く赤貧の中に育ちながら、彼の求める所は、常に不偏不党の「中正」にあった。「中正」を貫くためには、勇気と忍耐と実行力が必要である。それは、ただなまやさしい中間策、争いを避ける保身策などではなく、極致まで冷徹に見極め承知した上での高次元の信念と哲学の裏付けによって初めて可能なことだった。高行は、その哲学によって明治維新の牽引車となった政治家の一人だった。以下、「中正」を軸として展開する彼の活躍をみていきたい。

(1) 大政奉還への根廻し

勤皇か、佐幕かと、藩内が真二つに分かれて喧々ごうごうとしている時に、政治に筋を通して中道をいくには不屈な信念が必要だった。高行は勤皇論者であったが、同じ「主義者たちが熱情にかられ、随分暴論を吐いて当局者と嫉視反目、常に紛擾が絶えない」のを見かね、「自分らは同主義ではあるが、かく過激にして内訌を引き起こすようでは宜しくない。漸々に当局者を説き、互いに譲歩して勤皇の大主義を標榜し、一藩の意見を一致して天下に対せねばならぬと思うて、その調停には人知れず奔走した」(注51)

高行は昔日談にこのように語っている。彼が「中正」を実現する具体策として調停にのり出さねばならぬほど、土佐藩内は混乱していたのである。

土佐藩ではかねてより、上士と下士の差別がはげしく、藩主容堂公からして下士に対しては常に一線を画してみている所もあったから、指導権をとるのはいつも上士であった。それについて、藩内の事情に通じている人の説によると、

「当時、土佐には、土佐人と高知人があった。土佐人は土着の人民にして、高知人とは徳川の臣、山内家の臣である。勤皇を説き尊王を唱え、討幕を叫ぶ者は、皆是れ土佐人にして高知人ではなかった。上士は高知人である。下士は土佐人である。上士中、勤皇家と呼ぶるは僅かに五指に足らぬ有様だ」(注52)という。

いきおい上士には、因循姑息なやからが多かったが、米艦渡来後は藩政も除々に改革され、一方では必要とあらば砲術もとり入れるという吉田東洋らの改新の気風も見えてきた。しかし、下士は下士で、既得の権

利の上で利益に汲々たる上士層を憎むのみでなく、「天子は弁髦べんぼうの如き」(注53)などと公言してはばからぬ吉田らの考えにも激怒していた。そうした下士たちは、武市瑞山を中心として、尊皇激派を組織し、吉田派と激突がくり返されていた。

こんな中で、末席ながら上士である高行が、その五指にも足らぬ勤皇家の一人として目覚め、成長してゆくことは、因習をはねかえす「精神力」の表われを感じる。またそれは、藩を思い国を思う心であり、たとえ百万の敵が現われても我この道をゆかんとする倫理観の現われでもあった。

しかし高行は、旧慣墨守派にこそ反感を抱いていたが、吉田派の時代感覚には一目おいていたし、武市派の熱情にも心を動かされていたのでその一方に全面的にのめりこむことはなかった。そのため、文久三年一月には武市派の同志とみなされ小目付から左遷されたり、あるいは、慶応元年九月には保守派が利用しようとする突然郡奉行に抜擢されたりしている。そして、過激派の、片や吉田は武市の刃に倒れ、それを理由に、片や武市は切腹を命ぜられて、両端はそれぞれ露と消えた。この場合、高行がどちらにも所属しなかったのは死を恐れたからではない。彼は、そうした紛争をもう一だん高い次元からみていたのではなかったろうか。彼の客観性は、こと自分に関する記録に、武市派とみなされた時は「可笑也」と書かれ、保守派からの突然の抜擢には「丁度餅にでも打たれたようだ」と、淡々として記されていることから俗社会を脱した心境に伺えるのである。

高行が大政奉還に不可欠な人物だったのも、この「中正」に支えられ

た哲学と公正無私人格においてであった。土佐藩主夫人問題についても次のようなことがある。

「藩主豊範公の夫人長州毛利家の息女なるにより幕府の鼻息を窮うづい、其の離婚談を唱うるものあり、高行時に少監察たり、侃諤かんかくの論を吐いて其の非理を述ぶ。彼ら屏息へんそくして事遂に己やむ」(注54)

政治的離婚は人倫の大道にそむくと大声で唱え、議を一決した高行に人々の敬意のまなざしは集まったことだろう。右や左に傾いている趨勢の中で「中正」を主張するためには、透徹した視野と信念と勇気が必要であるが、それを彼は幼少年時代の文武修業により身につけていたのだと思う。

薩長のはげしい倒幕論の間で、土佐藩主は最後まで幕府を助けようとした唯一人の外様大名であった。そのため、藩論は勤皇とも佐幕ともつかず微妙にゆれ動き、薩長をいらだたせた。坂本竜馬は、「後藤象二郎は公武合体論者、否むしろ佐幕論者であるから、勤皇志士の間しに重きをなさない」(注55)と、他藩との折衝談判を高行に託した。

そこで高行と由井緒内は選ばれて京都にゆくことになるが、その前に藩の方針が決まらなければどうしようもない。郷士は大義のためには山内家を顧みずという所があるが、高行は代々仕えてきた藩主への恩義を、大義のためという所が返すような仕方は好まなかった。高行は、しばしば藩主容堂公に率直に進言して、ある時はからかわれ、ある時は聞き入れられるという、主従とはいえ心の琴線に触れ合うような間柄をもっていった。それは地位の上下や、主義主張のために相反目する人間の醜さとは対照的に微笑ましく明るい関係であった。

「一体豊信公（容堂公）は、明治初年迄華奢風流の名を恣にせられた。この時分（米艦渡来のころ）も、余程派手なことを好まれるが、もと豪邁の方で、一寸怒ると鬼焰当るべからざる勢、併し、英君であるに依って平素談笑せらるる時杯は、中々愛嬌があつた。自分はどうも公のなされ方が面白くないと思うと、屢々献言致す。公が御代を紹がれて幾くもなく『御先祖は勿論、御先代等の靈廟等は大切に尊信あそばされなければならぬ』ということをしり上げ、それから何時であつたか、大分長いものを書いて建白したことがある。処が御維新になつて公に謁した折に『貴様の長い建白は大層役に立った。俺はお蔭で貼物ができた』というてお笑いになつた」（注56）

これは昔日談の引用であるが、容堂公のウィットに富んだ冗談も、高行の誠実を認められた上でのことだと思つと、人格のふれあいとはこのようなことではないかとさえ思う。そして、いかなる歴史上の大事事件も、所詮人間同志の立場の衝突と和合のくり返しである以上、立場は異なれ、人の心を汲みとる心の広さと、信を貫く誠実さが、その根幹になければならないと思う。

さて、話はそれだが、高行はこの一世一代の大役に捨身でかかつた。そして、何とかして藩の方針を決めねばと「三日三晩藩庁を動かす」その結果やつと、容堂公から「出先のことは大義名分により処決せよ」と、臨機の処置をとる一札を受けることができた。（注57）こうして薩長が倒幕の兵を京都へくり出す寸前、土佐藩の大政返上がとりあげられ、幕府への義理と尊皇の誠を共に尽くし得たのには高行の蔭の力が非常に大きかつたのである。

この時の建白の主な計策は坂本竜馬が建て、容堂の説得は後藤象二郎が当たつた。したがって、史上に深く刻まれるのは二人の名であろう。しかし何事も、世に知られる人によつてのみ事が運ぶわけではない。かねて相談を受けていた高行が五才年下の坂本、八才年下の後藤の知恵参謀として、混沌たる藩論を倒幕にまとめるまでの助力は無視できない。高行が国運を左右する舵棒をしっかりと握つていたことに考え及ぶことは、維新の蔭にある活動を理解することにもなるのだ。「中正」の立場にたつて命をかけて、最善の策を立てようと眠れぬ夜を過した高行の心境を、日記は次のように綴っている。

「一藩ノ上ニ関リ、大ハ皇國ノ御大事ト申ス場合ナレバ、容易ニ粗暴ノ事ハ戒メザルベカラズ、去迎亦因循ニ流レテモ不相成（中略）終始中間ニアリテ心配セル事ニテ、最早今日ニ相成テハ決心スル処無之テハ不相成、只々死所ヲ得ルト万分一モ御為相成候義ヲ熟慮可致場合ナレバト、終夜相考候テ、寝ニ就カズ（中略）鶏鳴暫時快寝ス」（注58）

(2) 長崎騒擾の鎮撫

薩長土肥の力によりいよいよ維新の幕が切つて落とされようとしていたころ、彼は遠く長崎の地で活躍していた。というのは、慶応三年七月二十八日、大政返上の件で画策している京都の高行の下へ、「長崎で七月六日起つた英国水兵暗殺の疑いが土佐藩にかかつている」という情報とびこんだからだった。土佐の大目付としての立場上、急ぎ帰藩した高行は、そのあと続出する事件のためにずっと長崎に釘づけにされる

ことになる。維新の政界という華々しい舞台での活躍が阻止されたのは、一つにはこうした運命のいたずらも手伝っていた。(注59)

英国水兵暗殺事件の取り調べは、事が対外人のこととて、一旦こじれば藩のみか国運にも響くこと、相当に神経を使う問題だった。が、大阪藩邸に呼ばれた高行は、「風評を根拠として土州(土佐)人ともみなすはその意を得ぬ」と、強気だった。そして、「帰藩するなら英軍艦に同乗して案内してもらいたい」といい張る英大使をしりめに、「威嚇的に藩に軍艦を向けるなど甚だもって無礼」と断って、さっさと帰藩してしまった。この一件は二か月もはつきりしないまま不穏な空気が続いたが、結局、下手人は福岡藩の若者で、直後自殺したことが判明、福岡藩からも英大使からも土佐藩へ丁重な詫びが入り一件落着した。高行の強い意志が道を開いたのである。

ところが、続いて慶応三年九月一日、出張先長崎で土佐商会の若い武士による英米人傷害事件が起こる。これは、丸山の娼妓を泥酔した英米人が暴行に及ぼうとしたため、土佐商会の若者が制止しようとしたところ、侮辱したので己むなく抜刀したという事件だった。この件について高行は、「もし隠蔽し他日露見すれば重大な問題をひきおこす」といって岩崎弥太郎らの反対を押し切り、敢て届けを出させた。この処置は、情状酌量された穏便な判決を促し、反目し合っていた国際感情をも和げた点で非常に適切なものだった。(注60) これもまた、高行の適確な判断力のしからしむるところである。

長崎でのもう一つの事件は、慶応四年一月、鳥羽伏見の戦いに恐れをなした長崎奉行、河津伊豆守が、薩摩藩の攻勢を恐れ、公金を持って外国船で脱走するという事件だった。奉行不在では町に騒擾がおこる。騒擾がおこれば、在日外人を保護する目的で外人が上陸するかも知れぬという風評で一時も裕余できない事態に立ち至ったが、高行は海援隊をひきつれ、機先を制して奉行所へのりこみ、沈着な指示を与えて人々を安堵させ、かつ、奉行をとりおさえ公金をも奪還した。ここにもまた高行の勇気ある行動力が伺える。

通商条約締結以来、長崎には外国人が多く出入りし、それぞれ国柄や慣習も異なる所から事件が続発した。明治元年三月、高行は朝廷より、長崎裁判所兼九州鎮撫使参謀に任命され、その多忙な外交の任に当たっている。まだ外国人なれしていない日本人が、ばかにされまいと気負ったり、大事をひきおこすまいと異常に神経質になったりして緊張している、その感じが高行にも伺える。

が、その中でもとりわけ難しく一触即発の感があった外交問題は、耶蘇教禁止問題だった。耶蘇教は教権ばかりでなく、政権まで奪うのではないかという危惧から、わが国は通商の利潤を放擲してまで長い閉鎖国をしてきた。ところが、開国と同時に、この禁止が自動的にゆるめられることになったことは、政府として不安でならなかった。かといって、弾圧すれば見張っている外国人がただではおくまいし、放置すれば幕府の残党と手を結んで暴れかねない。禁教は、人間的立場、宗教的立場からいえば非難もあるうが、疾風怒濤の国情の中で、後世に悔いを残すま

いと慎重を極める政府の立場からいえば、止むを得ない措置であった。高行は中央政府からきた木戸孝允の下にあって、実際にこの実務に当たり、多くの信者を逮捕した。それについて諸外国の抗議に対する高行らの弁はこうである。

「明治政府になつたばかりで多事多難な日本には、今、耶蘇教害毒の有無を鑑別したり、理非を問うたりするにはあまりにも知識も時間もなすぎ。したがってわが国民のことは、わが政府にお任せ願いたい」(注61)

こうした当時の政府の状態をあまりにも率直にぶつけられると、外国高官も返すことがなかった。

これは、坂本竜馬と高行が倒幕の策を談じていた時の話を想起させる。高行が先の英国水兵暗殺事件で長崎にのりこんだ時、坂本も海援隊の関係で長崎にきており、毎晩のように語り合った。

慶応三年八月三十日の日記には次のように書かれている。

「才谷(坂本竜馬)曰ク、此度ノ事若シ不成バ、耶蘇教ヲ以テ人心ヲ煽動シ、幕府ヲ倒サン、自分曰ク、耶蘇教ヲ以テ幕府ヲ倒ス後害アラン、吾ガ国体ヲ如何、吾ハ神道ヲ基礎トシ、儒道ヲ輔翼トセント、才谷曰ク、今日如此ニテ迎モ事ハ不成ト互ニ議論ハ益敷成リタレドモ、才谷モ異宗教ヲ研究シタル事モ無之、自分モ神儒ノ道ヲ深く研究セズ、互ニ議論果テズ、所謂盲人ノ叩合ノ如ク相成、其中深更ニ相成候故、他日互ニ研究スベシト笑トナリ、寝ニ就ケリ」(注62)

耶蘇教弾圧は、非人間的とか何とかいう以前に鎖国による無知からくる政府の杞憂と、天皇を中心とする神道国家体制を作ろうという気負い

が原因だったと思う。禁教で拷問にかけられた信者の側からの描写は、遠藤周作氏の「女の一生」の「苦しみの谷」の項に詳しい。それで読む限り高行は、どこまでも体制の側に属し、職務のため人間のかなしみを断ち切れる非情な人間として非難を受けよう。しかし、情にさおさせば日本という小舟はたちまち転覆するかも知れない。小舟だけを頼り、小舟の中だけで成人した高行には、そのことの方が重大だったのである。高行は、一藩を越えて一国を思うことのできる政治家ではあったが、一国を超越し、世界の海でつながっている日本を鳥瞰するには、日本の鎖国はあまりにも長すぎたのだった。

ところで、幕末におけるこうした高行の公正な判断力、勇敢な行動力が果たした役割は、それがたとえ都を遠く離れた地であろうと、それがたとえ時代のふるいにかかれれば忘れられてしまう事件であろうと、歴史の大切な推進力であるにはちがいがなかった。いや、高行に限らず、日本中荒れ狂っていた当時、あちこちでこの種の活動があったからこそ、日本は新時代を開幕したのである。高行のもつ誠実と努力は、我々の祖先ならたいてい備えている徳でもあった。高行が比較的目立たぬ存在だったのは、日本人としてそうした点で特に意表に出る存在ではなかったことであろう。そしてまた、高行の家庭生活のレベルも、当時として決して平均を超えるものではなかった。高行がこれらの活躍のあと、錦を飾って帰る故郷の家は、日本の底辺を示すかのように貧乏暮しを続けている。

明治元年十月二十七日の日記はこう書いている。

「同夜ハ家族一同無事ヲ祝シ、深更ニ相成、他人ハ不来、一家ニテ

打解ケ談話、長崎騷擾ノ節、無事ニ処置セル事、又留守中熱病ニテ一同大患ナリシモ、孰レモ快氣セル様愉快至極ニ有之、殊ニ母上ハ御高年ニモナリ、殊更御悦ニテ、色色留守子供杯ノ事モ咄有之、子供モ頻ニ嬉敷悦ビ候、実ニ人間ノ楽ミ不過之候ト存候、乍併、此末如何ノ天下景況ニ至リ候哉、孰レ艱難ノ時節ト其辺ハ寸時モ忘レ得ズゾアリケル、扱一日休日ト相成候処、兼テ家事不如意ニ付、長崎ヨリモ金子モ差送り候得共、色々事情有之、負債モ相嵩ミ居候事ニテ、貞衛一人ニテ大ニ心配致シ、他ハ老人子供ニテ心配談ニテ、孰レ兩三日ノ帰省ニ付、其中負債ノ片付致シ置キ候義、彼是相談、遂ニ徹夜ニ及ビ候、天下ノ大事念頭ヲ放レズ、一家ノ事モ捨テ置キ候事モ出来ズ、実ニ以テ貧窮ハ万事ノ妨ゲト言ヘル、虚言ニ非ズト感触甚シ」(注63)

一國の国運を肩に背負い、やっと成し遂げて意気揚々と帰宅した晩は、今度是一家の借金の後始末で徹夜の相談、「実ニ以テ貧窮ハ万事ノ妨ゲト言エル、虚言ニハ非ズ」と心から慨嘆している。現代人にはちぐはぐとしか思えないこの情景、しかしそうした親の苦勞とは無関係に子供たちが明るく、久しぶりに帰宅した父親の周りを喜々として囲む様子は「実ニ人間ノ楽ミ不過之候」と書かれ、貧しい家庭風景の中にも幸せの灯はあかあかと燃えているのを感じるのである。

(3) 司法への尽力

長崎での数々の功績が認められ、同明治元年十二月、三十九才の高行は、朝廷より刑法官判事を任命される。以後、満五年半の司法部内にお

ける活動は、

「法司ニ輔副シ、カヲ撰律ニ至シ……」(注64)

と明治天皇が詠詞を賜られたように、法律撰定に精魂を傾けた年月だった。「臣高行」の著者、津田茂磨も「司法省の佐佐木というよりは、佐佐木の司法省であるといわれるほどだった」(注65)と、当時を回想している。

当時、わが国の司法部門は、行政から独立したとはいえ、まだ実質が伴わず、改善もし創設もなすべき多くの要務が山積されていた。明治二年九月、新律撰定の命が高行に下る。彼は明律を基礎とし、我が古制を加えて一年がかりで草案を練り奏進するが、この間学者側と政治実務家との意見が衝突することもしばしばで、これらの長所をとり入れ、編纂の事業を成功させたのは、やはり「中正」を旨とする高行の人格に負う所大であった。その後、司法関係の役名も度々改名され、高行も刑部大輔から参議になり、また司法大輔となるが、刑律撰定については成功まで高行が主管すべく命ぜられている。

ところが、法律の思想も既に中国法より欧米法の時代に移っているから、欧米の司法制度を実地に観察する必要があるということで、明治四年十一月から、明治六年三月にかけて、高行は岩倉具視らの欧米視察団に加わり、外地へ派遣されることになった。留守中、常々高行の剛直を嫌っていた人々は、大隈、井上に運動し「司法の仕事は「迎モ只今ノ佐佐木トカ穴戸トカニテハ埒アカヌ」と、司法大輔の上役である司法卿に江藤新平を推してしまったのである。(注66)

このころ高行は政界の面々と大分歯車がかみ合わなくなり、いっそ下野して農夫になろうかとさえ思いつめている。

『アトランチック』航海中熟思スルニ、高行ノ如キ頑愚、迎モ今日ノ政事ニ関スル事難哉、無識又盲ハ一体ノ事ナレバ致シ方モナシ、只政ノ上ニ著眼スル処大ニ違エリ」(注67)

高行の最もきらったのは「開化急ぎ」の軽薄さだった。木戸、伊藤、大隈、後藤、板垣、西郷、井上、江藤と彼は当時の政治家一人一人の不滿を日記に叩きつけ、「実ハ今日迄、天下一新ノ機会ノ勢ニ乗ジ来レドモ、全体天下ヲ料理スル真ノ政治家ニテハナシ」(注68)と、幻滅の吐息をもらしている。江藤新平は、その最たるものだった。「江藤ナドハ頗ル上手者ニテ、後藤ヘ取り入り、程ヨク表向中々傑白トカ豪氣トカニ見エテ、裏面ハ油断ナラヌ利口者ニテ、可恐人ナリ」(注68)と、日記は遠慮会釈なく続く。たとえば、高行は、「百事断然御改革ヨリハ、能ク日本ノ風俗慣習ヲ見テ、法律等御施行可然、今日ノ処ハ理財第一ノコトニテ、御費用ヲ省キ、能々政府上実著ニ御運ノコト」(注69)と、日本の風俗にも財政にもあつた漸進論を主張するのに対し、性急で改革を急ぐ江藤は、「フランスの法律を参考どころかただ翻訳し、そのまま表題だけ、日本民法と書き直して施行すべしとまで考えていたらしい」のである。そのため、「翻訳をむずかしがる訳者たちに『誤訳でもかまわないから急いでくれ』と、拙速主義をふりかざしてせきたてた」(注70)という。帰朝後、高行は江藤新平と面談した。その際、司法省への外人雇入れについて高行は、多く雇い入れれば通訳もいることだし、莫大な費用、二名で充分というのに対し、江藤は、数十人ほしいのに予算上できぬと

いわれ遺憾という調子である。「高行言ウ(略)互ニ吾ガ省、吾省ト権力ヲ争ウコトハ、中官以下ノコトニテ、長官ハ如此議論如何ト思フ也、ト申述ベタレバ、不面白様子ニテソノ論ハ止メタリ、其節江藤又云フ、此頃ハ諸県ニ人民蜂起ニテ、判事モ所々出張スルコト多々、又茨木県モ城焼キタリ迎、数人捕縛致セリ、実ニ多事ナリトテ愉快ラシク見エタリ」。

(注71)この江藤をみて、高行は「実ニ可憂可恐コト也」(注71)と述べている。そして、もはやこれまでと辞意を決意し、政界を退くのである。このあたりは高行の心中のやりきれない苦々しさか、かいまみられる記録である。高行はただ西洋かぶれの政治家たちにあいそが尽きたから政界を退いたのではない。彼は自分の所信は全うしたいが、江藤の下ではどうしようもないから、身をひいたのである。高行が江藤につきつめたことばを、おそらく江藤は陳腐な説教として聞き流したのであろう。だからこそ、話題を転じて、人民蜂起をおもしろがるような空しいことしか言えなかったのであろう。しかし、「長官は権力を争うべきではない」ということは、高行の政治家としての基盤であり、その基盤を異にするようでは、彼の指示を受けて仕事をすることは無意味と判断したので。

もし高行に「天下ヲ料理スル真ノ政治家」の条件をきいたとしたら、彼はおそらく第一に、この私利私欲がないことをあげたと思う。そして第二に、ただ一国の現在の状況を安定させるのみでなく、一国の将来をも見透せる人、第三に、周囲のいかなる状況にも足を引っ張られず、所信を遂行できる実力ある人をあげたのではないだろうか。その理想にもっとも近い人物として、大久保利通や岩倉具視に彼は心を許していたの

だった。

それならなぜ高行自身が、そうした政治家としての人生を全うしなかったのだろう。おそらくこの問いは、彼自身の心に何度も去来したことだろう。そしてそれが自嘲のことばとなって、彼の心の中へはねかえっていったのではあるまいか。「高行ノ如キ頑愚、迎モ今日ノ政事ニ関スルコト難哉」(注72)ということばは、皮肉まじりの自嘲であると共に、客観的な真実をも語っている。いつの世も政界は、清濁あわせのむ大河、もしくは汚れきった泥沼の如きである。いかに立派な主義主張も、政権を握らねば実現せず、実現せねば空論と化す。そのため、いかにして立派な政治の構想を練り、それを実現するかという大問題より、いかにして己れが政権を獲得するかを画策する人間が横行する、しぜん政界の品性は低劣になり、たまたま政権の座についた者は、得々としてその権利を悪用する。そういう人間にとって、立派な政治的構想は看板だけではないのか。江藤もそのありふれた政治家の一人と高行はみたのだろう。

高行は、こうした泥沼を清浄化する志は持っていたが、そのために汚濁にそまってまでして政権の座へ漕ぎつけようとは毛頭思わぬ頑固者だった。そればかりでなく、清濁合わせのむのが宿命の政界から、一点の汚濁まで除去しようとしたのではないだろうか。水清ければ魚住ようにまずのたとえのように、政界の魚たちは、皆高行にそっぽをむき出したように思えてならない。高行が政治家として全うできなかったのも、彼の人格の中にそうした当時の政界とは、あい入れない要素があったように思えてならない。高行の一図さは、自尊心とも不屈な信念とも結びつ

いたが反面、自分の理想とひとり相撲をとっているような「かたくなさ」にもなった。それは、若い頃、中浜万次郎から外国の地図をみせられて「他国ハ大ニテ日本ハ小ナリ」、是ハ万次郎ハ異国ニ居住候ヘバ彼国ニ左袒シテ斯カル偽作シタルモノ」(注73)と負けん気を出したあの心情と通じるのではなからうか。負けじ魂は、長い貧乏暮らしが彼に与えた宝であったが、一面では彼を頑固者にもしていたのである。

高行からみれば、司法卿となってその才を發揮している江藤は、「竦腕を揮つて司法行政の積極的放漫政策を施し」(注74)ているように見えた。にもかかわらず、「世の明治法制史を作るものが、往々にして法律の撰定と法治国の体裁を得しめたる創業の功を、独り江藤新平にのみ帰し、高行の功を閑却する」(注75)のを見て、側近の津田が異議を唱える心情は充分察せられる。

ところが、征韓論に敗れて江藤が下野するや、在野にあった高行は再び大判事に任命されることになる。代わって司法卿は同志の大木喬任とすることで、今度は快くひきうけている。さらに大判事では、司法行政に関与できないということで、再び司法大輔に任命され、そのあと「佐賀の乱」で、政府反抗を企てた江藤新平が、高行らによって梟首の刑に処せられるという顛末は、江藤にとっては何とも皮肉な運命だったが、天が高行の「中正」をやっと認められたようにも思うのである。時に明治年、高行は四十六才になっていた。

(4) 君主国家への構想

高行にとって政治の大方針は、欽定憲法による君主国家をうちたてることにあった。それは、少年時代から持ち続けた彼の勤皇精神の発露であり、明治維新による天皇制国家の実現は、その宿願の成就でもあった。

「明治の実権を握った新政府は、その統治のため、わずか十四才の明治天皇を、『玉』として据えた。」(注76) それ以降、半世紀以上にわたり、我々は万世一系の君主国家と、神聖不可侵の天皇の存在を教えこまれてきたが、幕府の歴史の長さに比べれば、名実共に天皇が統治した歴史はそのわずか三分の一である。ましてや当時、長い幕政のあとで、急に天皇が権威の座につかれても、一般民衆はしっくりしなかったことだろう。それをここまで国民に浸透させ、民心の統一を成功させたのは、明治の政治家たちの努力の結果だった。政治には外国とのかけひきも国民の経済安定も必須であろうが、民衆の精神生活の指導も必要である。その支柱を立て道徳の涵養に尽力した一人が高行だった。

歴史家の通説によると、明治初年における指導者階級の天皇の位置づけは、我々が全く考えも及ばないほど実用的なものとして捉えられている。たとえば、菅孝行は、

「維新政権の中枢にある人々は、天皇を統治のために不可欠な実用的な手段・機能と考えていたといえる。彼らはそういう意味で非常に醒めたプラグマティストであった。いいかえれば、彼らの天皇観は、先駆的な機関説にはかならなかったのである。彼らは、天皇という存在に対して、常にクールであり冷酷であった。たとえば、明治の父、孝明は、一貫して親幕府的な人物とみなされており、倒幕派にとって

は都合のよくない人物だった。若くして彼が世を去ったのは、倒幕派によって謀殺されたからだというのが定説になっている。」(注77)という。

一国の政治には権謀術数も必要であろう。当時、三条、岩倉、木戸、大久保、伊藤らが画策してきたからこそ、何とか日本は混乱を收拾し、一つの路線がしけたのである。しかし彼らは初めから、天皇の意志など考慮する気もなく、まして、天皇を神聖化したり、精神的支柱にしようなどという気はほとんどなかった。親政論はあとのつけ足しで生じたことだったというのである。

こういう裏話は、戦後四十年を経た今だからこそいえるのである。これは天皇制が据えられる明治十年代より、二十年代にかけての、まだ天皇制について自由に論じ合える時代の雰囲気の中で、福沢諭吉が「帝室論」で「一国の人心を収攬するには、宗教でも学問でも音楽でも謳歌でも王室でも、なんでも利用すればよい」(注78)と、いつているのをもても真相であろう。驚くのはむしろ、それ以後の我々が、いかに一つの類型にはめられてものの見方を教育されてきたか、ということの方かも知れない。

しかし高行は、便宜上天皇を利用するとか、繰るとか、そんなことのできない人間だった。本音と建前の二重操作を器用にするよりも、誠意一筋で他をしのごくの方が、性にあっていという融通のきかない人間だったのではないかと思う。高行は、側近くおられる天皇を、確かな手ごたえの中に「人間天皇」として敬愛していた。それは、藩主容堂公に仕えた心と共通するものがあつたらう。

明治十一年三月、高行は、明治天皇の君徳培養の任にあたる一等侍輔となるが、これが彼の宮中入りする発端である。

四月下旬、天皇は体調をくずされたが、頑として拝診をこぼされ、周囲の者が困り果てた話がある。原因は、侍医の勧めに従い転地された静寛院宮が、かえって重くなられ薨去されたことをお気にされたことだったが、さりとておことばに従うわけにはいかない。その時のことを高行は日記にこう書いている。

「今日一步モ退キタレバ、自分ハ侍輔ノ上席ナレバ、愈御六ヶ敷御事ナリト決心致シ、凡ソ二時間モ御争ヒ申上候、其中余リ御迫リ申上、逆鱗ニ解レ、大ニ御叱リモ相蒙リタレ共、不屈イツ迄モ退出セザルト覚悟相極メ候処、段々御和ラギニ相成リ、御沙汰ニ、最早今日ハ診察ニハ及間敷トノ御事ニ付、御沙汰ノ通り、今日ハ、思召ノ通被遊^{アソビサレ}、明朝拝診被仰付度旨申上、退出セルニゾ」(注79)

前年の静寛院宮のご薨去もさることながら、十余年前の父、孝明天皇の若年の急死については、天皇はどのように受けとめられておられたろう。便宜上の手段として御自分が利用されていることも、薄々察せられているとしたら、疑心暗鬼も手伝い孤独な中で悩まれることも多かったのではなからうか。そうした天皇にとって、高行の捨身の忠告は激怒されながらも心に暖く触れるものがあったと思う。それは、次の津田茂麿の言によっても証明されよう。

「明治天皇がかつて藤波言忠子拝謁の際、佐佐木は忠臣なり、佐佐木には何事を申し聞け得るが、他の者へは十分注意を要す、朕の申す事を利用して困ると仰せられたり、と、著者は直接同子爵より拝承せ

り」(注80)

政治は建前だけで動かせようが、人の心を動かすものは本音である。高行が、元田永孚らと共に天皇の絶対的信任を得たのは、やはり本音故、人格故ではなかったか。それが結果として、高行らの天皇を動かす力を大きくしたといえる。

「天皇の伊藤、森、陸奥などに対する批判的発言は、宮中の保守派の動向にかなり強い影響を受けたものであることは想像に難くない。明治二十年前後における政府と宮中保守派の対立は、明治十年代初頭における政府と侍輔グループの対立が尾をひいたものであろう」(注81)と、鳥海氏も書いておられるように、侍輔の天皇への感化は、天皇の成長と共に、ますます政界に隠然たる勢力を広げていった。天皇が、徳望よりも才識に富んだ積極的開化論者に危惧の念を抱かれたのも、高行らと心を一にする所であり、それは高行らの教育の成果でもあった。明治十二年、侍輔職は廃止されたが、高行は、十三年には元老院副議長、十四年には、参議兼工部卿として、自由民権運動に対抗し論陣を張った。

高行の勤皇思想は、幼年時代の太田平八郎の乱・少年時代の原平三郎との接触・また青年時代には国学者、鹿持雅澄・儒者、大橋訥庵などの感化により、徐々に、しかし深く、彼の心に浸透していたようだ。そしてそれは、この激動期に動かし難いものとして彼の心に定着したのではなからうか。理にくらく、情の赴くままに各地で起こる叛乱、時代の牽引車にたらんとするものの軽佻浮薄な西洋一辺倒、敢て誤解を恐れず言え、そこに彼は「衆愚」をみたのではなからうか。衆愚のままに一國が揺れ動くことは、高行にとって最も憂うべく恐るべきことだった。

「衆愚」に舵をとらせれば日本は永遠に悔いを残すであろうという老練心が、欽定憲法の大黒柱を何としても日本の中心に据えようという熱情を高行にかりたてたのだと思う。高行にとって、「天皇親政」は、他の政治家とは全く別の意味で、つまり、便宜上の形式的役割ではなしに不可欠なことだった。日本の民心の拠点を古代にない天皇におけば、私利私欲の人間性を野放しにせず、君民一体の強力な日本国家を建設できるのではあるまいか。それが彼のえがいた理想国家だったし、彼の政治目的でもあった。

明治十三年十二月、有栖川熾仁親王にさしあげた建白

「是迄ノ情勢ヲ察スルニ至尊ト大臣トノ責任ニ権限無之、動モスレバ、善事ノ称大臣是ヲ受クル事アルモ、悪事ニ係ル責ハ必ず至尊ニ帰ス、仮令バ、世情ニ称ハズ断然全国ヲ鎮庄スベキ一大号令ノ如キ、必ズ御名ヲ以テスレバ也、(中略)然レ共、当時ノ人情西洋ノ波及ヲ受ケ、沿革ヲ成スノ勢、若シ往々此模様ニ随ヒ至尊ノ耳目ヲ拈メズ、事ノ善悪、大臣ノ目的ニヨラセラレ、一旦適度ヲ失シ、世怨ノ解クベカラザルアラバ破裂ノ勢、何ゾ階級ノ内情ヲ問ハン、乍懼只至尊ノ不明ニ帰セン而已、寔ニ恐レテモ又可怖事ト奉存候」(注82)

これは行政官監察制度設置についての建白であるが、これをみても、高行が若い天皇の前に立ちほだかるようにして、至上の御名を汚すまいとしている姿勢が伺える。彼の君徳倍養への熱意はそれ故になお強められることは必須だった。

しかし、このような高行の姿勢は、当時の人民の困苦や、山積された收拾すべき問題の前には、観念的で無力な印象しか与えられなかったの

だろう。色川大吉氏の述べておられるように「明治十四年から十八年まで、この参議時代の四年間に、高行がなに程のこともし得なかったということが、彼の政治的生命を決めた」(注83)のか、十八年以後、彼は公式には全く政界を離れてしまった。

高行のその後は、殆ど宮中での奉仕に終始している。明治二十年には明宮(大正天皇)のご教育主任(明宮が十才ごろまで)、二十二年からは常宮、二十三年からは周宮のご養育主任として、妻、貞衛と共に終生を皇族の教育に捧げている。そしてそのかたわら、君主国家形成の側面的活動として、国民の思想啓蒙に情熱を傾けたのだった。即ち、明治二十一年より十余年間にわたる「明治会」の活動、明治会叢誌の発行、明治二十九年以後の皇典研究所長、国学院院長としての活動等がそれである。急激な洋風文化の流入に対し、日本独自のものを維持し続けるべきだとする信念は、晩年までこうした活動となつて続けられた。それはおそらく高行にとって、残り少ない人生のライフワークだったのでなかろうか。

君主国家への構想は、高行が幼少年時代より受けた武士道や儒学の精神とも一致するものだった。本来「中国の儒教では、『忠』は自分の良心に対する誠実を意味するが、日本では、まごころや身を捨てて君に尽くすことを意味する」(注84)ものとして、武士道と結びついて発展してきた。しかし、高行の場合は、中国の儒教という「自分への良心」が武士道ともなり、また天皇への忠誠ともなった。また、彼が学んだ国学は、古代日本の国体が、天皇により支えられていたこと、天皇家の宗教、神道は、そのまま清浄潔白の日本精神を表わしていることなどを教えた。こ

れら結びつけた所に、高行は日本人本来の生命の根元のようなものを発見し、これこそ古代からの日本精神、「日本魂」として国民に浸透させようとしたのである。

このことは、西欧即先進国としてその模倣に追われていた人々に、日本人としての自覚をよび起し、幕藩体制下、実用教育しか受けなかった庶民に、生き生きとした精神力を吹きこんだ点において、大きな意義があった。またそれは、彼の親友、元田永孚が教育勅語の草案に命をもらったのと全く平行した時代の歩みだった。日本が大国の脅威にさらされながらも、植民地化を免れたのは、まさにこの誇り高い国民性の涵養のたまものと思う。

西洋文明流入の恐るべき勢いを危惧して、当時盛んにいわれたのは「和魂洋才」ということだった。それは冒頭にも書いたように、いかに美味な食事をして、胃が丈夫でなければ消化できない、という類のことで、西洋文明の優秀さだけに迷わされず、日本精神の卓越さに目を向けよという警告である。高行は日露戦役直後、皇典講究所員に、次のように話している。

「日本魂は他の物質的の教育と相まって国家の富強というものを形作り、国家は天壤無窮に栄え行くべきものであると信じます。勿論、将来国家の平和を欲しますが、今日世界列国の有様は御承知の通りでありますから、イツ何時、どういう事変に際合せぬとも限りません。また、国家の進歩とともに、種々の思想がその間に入りまするにつきましては、益々この精神を養成することが必要であると信じます。是から先は所謂『和魂洋才』であります。」(注85)

高行は、赤貧にもめげず文武修業を怠らなかったが、体系だった学問をした学者ではなかった。また、欧米諸国へ外遊し、彼なりに学ぶ所大であったが、福沢諭吉のような自由な近代感覚をもたなかった。彼は自分の過去を誠実に生きてきただけに、封建道徳に自らを縛る心も強く、いきおい、日本の習俗の常識から脱しきれなかったように思われる。このころの高行はすでに七十五、六才、かつて坂本竜馬と交流していたころの「一ト芝居興業スレバ事始マルベシ」(注86)というような若さが見られないのは当然かもしれない。彼はひたすら国体の維持を懸念していた。そして、「何故にわが国にのみ左様に結構な日本魂があるのか……わが国は所謂神国でありまして、純粹潔白な神の御心によってできた御国」(注87)というような宗教的論理を展開していくのである。あれほど、理路整然とした説得力をもっていた高行が観念的に傾いていくのは政府内部からの牽制だろうか。また終止一貫「中正」を旨としていた彼の思想に飛躍がみえてくるのは、日本のおかれた国際的地位の危さからくるものであろうか。西欧の技術はどんどん吸収すべきだといいながら、一方で天皇の神聖化と日本精神の強化を叫ばずにいられない高行に、私は当時の小国日本の必死な防御本能をみる思いもするのである。

高行はおそらく彼の君主国家への構想に、日本の洋々たる王道楽土の前途を夢み、無双無比の日本精神が、世界の絶賛を浴びることを期待していたことだろう。まさかそれが半世紀足らずで第二次大戦をひきおこし敗戦と共に崩壊するとは、予想だにできなかったことだろう。あれほど誠実に生きた高行の理念が、なぜそうした結末をみたのか、それは、明治以降の日本が、列強への対抗意識にせかされて、国粹主義、国家主義

へとひた走り、国際的均衡感覚、つまり国際的な「中正」への視点を見失い、ハンドルをきりそこねたからに他ならない。

高行が永眠したのは、常宮、周宮両内親王の御婚儀が整われてまもなく、明治四十三年春だった。危篤の報が天聴へ達するや、天皇は従一位勲一等侯爵の位を賜られた。高行は、「身を土佐の百石取りの微禄からおこし、予て大君に捧げ奉ったこの身も、維新の風雲に死に損ね、不才能何の取る所なきに拘らず」(注88) 寵遇を賜った君恩に心から謝意を述べた。そして傍らの夫人には、妻に先立たれた知人の名をあげながら、「世の常としては男が先に女は後より歿するが当然なるに、土佐人は矛盾のみ多かった。しかし予は、汝よりも先に逝き、今後はこの矛盾も改まらん」(注89)などと、軽いユーモアを交えて語った。

高行の人生の終幕は、志士の最期とは思えないほど人間的な穏やかな微笑に包まれ、高行の人格のおおらかな完成をみる思いがする。

四、現代が佐佐木高行に学ぶもの

ひとりの人間の生き方を理解するということは、その人間や時代についてよほど深く広い知識をもっていたとしても難しいことである。だから、高行の老大な著作の中、氷山の一角である「保古飛呂比——佐佐木高行日記——」を中心に、ほんの僅か公開されたものに目を通す程度

で、高行の人格を云々することは不可能であり不遜も甚しい。私はただ高行を少しでも深く知ること、明治人の生き方をかいまみ、現代について考え直すよすがとしたかったのである。

日本の偉人伝に貧困はつきものようだが、それにしても高行の貧困は、現代人には想像を絶していた。それほど貧困な下級武士に、どうして、位、人身を極めるまでの榮譽が与えられたのか、佐佐木高行の略歴をみた時、私には先ずそれがひっかかった。偉人の生涯は大抵奇蹟に富み、先見の明が伺える。しかし、高行の生涯から私はそうしたものを感じるよりも、むしろ平凡な我々と通い合うような親しさを感じた。その貧窮、その素朴な性格が、異例の栄達と結びつく過程には何があったのだろうか。

今こうして彼の生涯を、大まかに辿った私には、それは彼の高傑な「人格」ではないかという感が深い。後年高行の果たした役割は、すべて幼年時代よりたゆみなく続けた文武修業が実を結んだものである。が、それを貫かせたものは、逆境の中で知った人間愛、忍耐力、そして武士の家柄に流れる誇りであった。高行の活動はすべて赤誠に発し、それが不偏不党を貫く「中正」という形に凝結していったのだと思う。

明治初期は、既成道徳が崩壊したものの、新しい道徳はまだ模索している移行期であった。西欧文化を追いかけ、近代国家を建設することに夢中で、そこにどんな人間観をもちこむかは判然としないまま、波のうねりに押されていった時代だった。そんな中で高行の考えは、下級武士のしきたりから、自分の赤誠を幕末には藩主に、また新政府では天皇に捧げるという方向にしぜんに向かっていった。その意味では、高行の生

き方は非常に奉仕的で、封建道徳の尾をそのまま引きずっているような所があった。しかし、もう一步つっこんで高行の言動をみる時、そこには明らかに彼自身の主体的働きかけが感じられるのである。藩主や天皇への命がけの進言、世論に対しての必死な抵抗、それはもはや既成道徳の云々ではなく、彼の心底の叫びであるように思う。彼にとって「中正」とは、そうした自己への誠実から生じたもので、そこに私は近代精神の萌芽をみる思いもする。不偏不党には誠実な意志力と、強靱な批判力が必要なことはいうまでもない。意志は自主独立、批判は普遍的真理を求める精神である。人間が最も人間らしく、自分の道を切り開いてゆくためには、より高次元なものの見方が大切なことを、儒教では「中庸」といったが、高行が命をかけても守りぬこうとした「中正」はこの「中庸」と重なるばかりでなく、アリストテレスの「メソテース」や、カントの「真の中道」(注90)という古哲の真理にも通じていた。それらは単なる中間でなく、二つの対立を越えた高次元の道であった。さらに私はこの「中正」を支えた彼の人格の中に、孟子の「親・義・別・序・信」という人倫五常説、またプラトンの「知恵・勇氣・節制・正義」という四元徳に通じる考えをもみる思いがする。それは洋の東西を問わず、人間として、何ものかを打ち出す根元となる「徳」ではなかったか、と思うのである。「中正」を貫く高行の人格は、新しい時代のうねりの中で、ある時は非難され、ある時は曲解されながらも人々の心を動かし、高行の昇進を促したのだった。

ひとりの人間が昇進してゆくコースは、二通りが考えられる。一つは自分からエリートコースをまっしぐらに進み、トップの席を獲得するコ

ース、もう一つは他者からその人格、実力がかわれて認められひきあげられるコースである。高行の場合は、全く後者の昇進だった。薩長土肥の四藩の勤皇の志士が、維新政府を牛耳ったのも、これらの藩は早くから優秀な人材が互いにひきあげあい、結集したためと思われる。高行はその中の土佐藩で、貧乏武士とはいえ一応上士だった。そのため、藩主容堂公にも近づかれ、また新政府では天皇の側近として、三条実美、岩倉具視らとの接触も多かった。高行の人格がこうしたすぐれた時代の先駆者によってとらえられたことは、幸せなめぐり合わせというべきだろう。

維新は人材を求めていた。波のうねりとともに、志士は各地に輩出したが、また潮がひくように消えて行った。意見の相違から各地で果たし合いが起こったり、また襲われたりして、優秀な人材がはかなく散ったり、意見がとり上げられず下野したりして、政府は有為な人材に不足していた。逼塞願を出すまでに経済的にはおちぶれている高行が、藩命により復帰するものもそうした時代に彼の人格が求められたからだろう。藩や国を思う高行の人格と、それへの積極的な行動力が根底にあったものを言ったことは確かである。歴史の舵をとる者は、先見の明をもつ強烈な数少ない個性であると同時に、人々に響き合う誠実な人格ではないか、それが彼に榮譽への道を開いたといえよう。

ところで、それから百余年、現代は高行のころとは大きく変わって世の中は長足の進歩をした。大戦後四十年の技術と医学の進歩は、日本を世界一位の長寿国とし「死」を縁遠くした。経済成長は人々に貧困を忘れさ

せ、生活の機械化は人々を勤勞からも遠ざけた。豊葦原ちいばさきの千五百秋ちひさきの瑞穂みづほの国は、ハイテクノロジーの工業国としてすさまじい勢いで変身し、かつての欧米列強をしのぎつつある。

テレビのコマーシャルは日がな一日化粧品から始まり衣服、家電製品、マイホームと、手を変え品を変えて我々の関心をひくが、すべて見えすいた、目先の文明である。コンピューターで高い偏差値をはじき出すための知識は詰めこむが、徳育の軽視された教育もその例外ではない。貧困の時代が不屈な人間を育成する豊かな土壌だとすれば、虚飾に充ちた現代は精神を枯らす農薬のまかれた土壌かも知れない。文明の進歩に伴う精神の荒廢、平和に伴う精神の弛緩、敗戦によって魂をぬきとられた日本人は、そのまま心の空洞を埋めかねている。日本人はどうなるのか！

私はもう一度明治人の声をききたい。既に八十にならんとしている高行は、彼の日本魂論で次のように言っている。

「過日もある教育家が、どうも日本人のように名誉のために死んだり何かしては困る。義務のために死ぬようにしなければいかぬといったそうで、新聞雑誌などで大分議論もありましたようであります、老生の考えでは、さような事をいう人は、まだ生死の間に身をおいたことのないものかと思ひます。中々死というもの易いようなもの、その実難しいもので、一通りの義務とか名誉とかいふもので、そうたやすく死ぬるものではありません。将卒が従容として戦場の露と消ゆるというものは、もとより日本人は、この国土に生まれると同時に、君国のために身を捧げているのでありますから、一通りの

名誉や義務などということは通り越して、苟もその一身が、君国の安危に関するから、負けてはならぬ、という忠誠の心が溢れて、モウハヤその他を顧るに暇がないからの事で、言葉を変えて申せば、奉公の熱火というものが、満身に燃え立ってくるからの事でありませぬ。それを彼是申すのは、机上の空論といわなければなりません」(注91)

最後になって私がこうした時代錯誤ともとられる高行の時局談を敢えて引用したのは、少くとも高行の活躍した明治初年から、昭和の今日に至るまで、いくつかの戦争で散っていった多くの日本人も、こうした思いではないかと思つたからだ。その尊い犠牲の上に、終戦があり、今日の平和があることを思えば、我々は彼らの命とひきかえにして得られたこの平和を、感謝することもなく上まで文化にうつつをぬかしている愚を恥じなければならない。貧乏国をここまで盛り上げてきた日本人の、誇りと底力を見直すべきだ。

物質的に豊かになつた今、我々は何に命を投げ出せるほどの生き申斐を見出しているだろうか。多くの人は、この問いに即答できない精神の空白をかかえている。豊かであるべき現代に、意外に広がっている精神の荒廢、弛緩に我々は先ず目を向けなければならない。時代は隔つても、人間が究極に求めるもの、それは物質ではなく、人間性である。豊かな人間性をもつ人格こそが物質文明を人間らしく生かすのである。文明の過信が「文明のおとし穴」(注92)に落ちこむ危険を私は心から恐いと思う。

いかに長寿国とはいえ、人の命はたかだか百年、その命をいかに燃焼し、満たされた生を全うするか、そういう人生の目標を、一人一人が他

律的ではなく自ら考えてゆく姿勢の中に、新しい時代精神は生まれると思う。自分の生を見つめる心の中に、おのずから生まれる母国への愛着、それが愛國心の萌しではなからうか。高行の生涯は、そうした生き方を立証して私の心に素朴な感動を与えたのである。

私は「佐佐木高行」の生き方を、できるだけ距離をおきながらこまめに概観してきた。その結果近代日本精神の曙を明治人の心の中に見出すことができた。しかしこの「日記」を通読し、そこから受けた感動をいかに現代の教育に生かすかという具体策になると、この終章は、そのまま序章となって出発点に立たされた思いである。彼の生涯が、いかに素朴な感動に充ちていようと、我々はその足跡をそのまま踏むことはあり得ない。たとえば、高行の時代の「切捨御免」や、初めてみる「世界地図」への驚きなどはもとより、維新という転換の時代のざわめきや、その中からの湧き上がるような感動も今は遠い世界である。高行はどこまでも過去の時代の人間なのだ。だが私の素朴な感動は、時代を越えてなお響く人間のたくましい誠実な生き方に対してであった。それは人間の心の原点に思えた。

「日本の歴史の中で、現代ほど恵まれた時代はない」とは、明治以来を生きてきた古老からよくきくことばである。だからこそなおさら、このよき時代の生を全うするため我々には高行のいう「胃の腑」を鍛える哲学がなければならぬ。そのキーポイントとして次の三点を「高行日記」は私に示唆してくれたのだった。

第一に、自己に対する誠実さである。ともしれば激論の渦にまきこま

れて見失われがちな自己を、彼が客観的な視野「中正」によって支え貫いたのは自己への誠実な生き方があったからだ。

第二に人のため国のために捧げる愛の深さである。現代、我々は愛の対象をどこにおいているだろうか。それを見出せないための生き甲斐の喪失がありはしないだろうか。高行は家族への愛の深さもさることながら、それを藩のため国のためへと広げて命を燃焼させた。天皇制支持は祖国愛のあらわれだったのである。

第三に、それらを成就せしめたのは不撓不屈の精神である。時代の逆境と貧困がたくましくして育んだ不屈な闘志を、現代日本の豊かさの中で身につけるにはそれなりの創意が必要である。人は局限に立たされてはじめて実力を発揮する、そうした練磨のための逆境を教育の過程でとり入れることは欠くことのできない必要性と思われる。

我々は現代の状況の中で、明治人からバトンタッチされた日本の精神にさらに磨きをかけて次代へひきわたさねばならない。高行を育てた武士道は今の時代にそぐわないとしても、「武道」というその「道」のきびしさを、人間が生きる道の律として自分の中にどのようにとり入れか、そうした数々の問題を抱え、出発点に立った思いで私は一時筆をおく。

(本学助教授Ⅱ哲学、道徳教育担当)

佐佐木高行年譜

西暦	年号	年令	高行年譜	時代背景
1830	天保1	1才	高知県長浜町瀬戸に生まる(10/2) 実父既に(5月)没す	伊勢おかけ参りが全国的に起こる
1831	2	2	養父は高下(谷五太夫二男)となる 養母は千代(実姉)	
1832	3	3		水戸学の隆盛
1833	4	4	高知城下、川原町へ転居	この年より天保大飢饉(39)
1834	5	5		水野忠邦老中となる(5月)
1835	6	6	初めて大守、豊賢公に謁す(閏7/1) 谷百次(養父実兄)自殺(5/24)	
1836	7	7	養父発狂自ら顔面を切りつける(7/中) 谷五太夫(養父の父)病死(閏7月)	一揆頻発
1837	8	8	手習師、柴田敬吉に入門、習字読書を習う	大塩平八郎の乱(2月)
1838	9	9	養母(姉)に女子「於亀」出生(10/14)	
1839	10	10	「於亀」病死(5/23)太平記好みて読む 養父の従弟沖助市百姓切捨(12/25)	
1840	11	11	養母に男子出生(8/9)まもなく死亡(8/13)	清、アヘン戦争(42)
1841	12	12	儒家、大町善七に入門、四書の素読を受く 養母女子を出生(11/12)	天保の改革開始
1842	13	13		天保新水令
1843	14	14		水野忠邦の失脚
1844	弘化1	15才	元服三四郎と改む	
1845	2	16	城下、永國寺町へ転居(9/8) 養父より家事を任される	
1846	3	17	儒家、岡万助に入門五經の素読を受く(2月) 今枝甚左エ門二女と婚禮(12/3)	
1847	4	18	妻、今枝二女離別(4/19)原増右衛門長女と婚禮(12/25) 従弟、原平三郎らと軍書会読(9月)	

1848	1848	1849	1850	1851	1852	1853	1854	1855	1856	1857	1858	1859	1860	1861	1862	1863	1864	1865	1866	1867
原平三郎病死 (5月)	嘉永1	文武の修業 (城下各道場巡修) 女子千勢出生 (1/6) 妻・原増右衛門長女と離別 (7/29)	美濃部忠助長女と婚礼 (4/15) 同女と離別 (12/2)	鹿持雅澄に國家を学ぶ (7月) 中浜万次郎帰國、異國の地図をみる	江戸へ剣術修業 (8/23) 羽倉外記・斉藤拙堂・藤森弘庵・佐久間象山を訪う 露船下田へ (6月)	帰國 (2/20) 国久市右衛門長女貞衛と結婚 (4/11)	江戸へ米艦再来のため派遣 (2/23) 大地震被災 江戸へ米艦再来 (1/4) 日米和親条約 (3月) (11/4)	帰國、地震のため杓田村へ転居 (4/29) 江戸大地震 (10月)	暹羅願 (4/下) 養母男子 (高輝) 出生 (7/6) 江戸へ操練御用として派遣 (9/1)	帰國 (6/29) 調練役罷免以来二年土佐に還塞女子於馬誕生 (2/3)	井伊大老通商条約締結 (6/7月) (米英薩蘭渡来)	安政大獄 (10月) 長崎・神奈川・函館貿易開始	江戸へ臨時御用として派遣される (3/20から10月) 桜田門外の変 (3月) 米艦艦起一揆煽発遣米使節 (福沢諭吉)	帰國 (2/21) 文武館の文武調役 (6月) (11月) 吉田東洋、武市瑞山の対立激化、大病危篤状態 露艦対馬占領事件	寺田屋の変 (吉田東洋殺さる) (4/8) 大病全治 (6月)	小目付より左遷 (1月) 武市派とみなされて海防御用取扱、幡多奉行、三郡奉行歴任 下関外国船砲撃事件 (5月) 薩英戦争 (7月) 七郷落ち (8月)	養父、高下病死 (50才) 家督相続 四国連合艦隊下関砲撃 長州征伐 (8月)	郡奉行兼普請奉行、百三十石 (9月) 武市瑞山切腹を命ぜらる。 開成館御用金調達反対薩長連合 (1月) 郡奉行・普請奉行罷免 (6/19) 小目付 (12月) 家茂死す (7月) 將軍慶喜 (12月) 江戸大阪打ちこわし	京都で薩長と接衝 (6月) 長崎英人暗殺事件 (7/8月) 坂本竜馬暗殺さる (11/15)	「えいじやないか」 (8月) (9月) 王政復古の大号令 (12月)

1868	明治1	39才	長崎奉行脱走事件(1/中) 耶穌教逮捕(4月) 従五位下(12月) 刑法官判事(12月)	鳥羽伏見の戦(1月) 五か条の御誓文(3/14) 明治改元(9/8)
1869	2	40	従四位下(5月) 刑法官副知事(5月) 刑部大輔(8/4) 弟高輝(14才) 上京 濟、中老職に就く	薩長土肥版籍奉還(1月) 東京遷都(3月)
1870	3	41	参議(2月)	新律綱領を頒布(12月)
1871	4	42	司法大輔(7月) 欧米渡航(10/22~明治6)	陸藩置県(7月)
1872	5	43	渡欧中 山内荏堂公薨去(6/21)	学制頒布(8月)
1873	6	44	帰国(3月) 司法大輔退く(4/17) 征韓論破れ 江藤下野(10月) 大判事(11/13)	徴兵令布告(1月)
1874	7	45	司法大輔(1月) 左院副議長(7/5) 江藤新平刑死(4/13)	民選議員設立の建白(1月) 佐賀の乱(2~3月)
1875	8	46	元老院議員(7/5)	江華島事件(9月)
1876	9	47	元老院に憲法起草の命(5/18)	
1877	10	48	高知で板垣派の反乱鎮撫(10/30)	西南の役(2~9月) 西郷自殺(9月) 木戸孝允病死
1878	11	49	一等侍輔(3/5) 政府主流と対立	大久保利通暗殺(3/5)
1879	12	50	侍輔制度廃止、宮内庁御用掛	
1880	13	51	元老院副議長(3月) 東北地方の視察(1~3月)	
1881	14	52	勲二等(7月) 正四位(11月) 参議兼工部卿(10/21)	国会開設の詔勅(10月)
1882	15	53	勲一等(11月)	
1883	16	54		鹿鳴館開館(7月)
1884	17	55	伯爵(7月) 従三位(12月)	
1885	18	56	宮中顧問官(12月)	
1886	19	57		条約改正交渉(井上)
1887	20	58	明宮(大正天皇) 御教育主任(7月) 正三位(4月)	交渉失敗に終る
1888	21	59	枢密院顧問官(4/30) 明治会々長就任・明治会叢誌発行(5月)	

1889	明治 22	60	才	神祇院設立に尽力 常宮御養育主任(2月)	
1890	1890	23	61	周宮御養育主任(2月)	大日帝國憲法發布(2/ 11)教育勅語發布(10/30)
1891	1891	24	62	親友 元田永季(1/22) 死す	三冬実美死す(2/18)
1892	1892	25	63		条約改正交渉(陸奥)
1893	1893	26	64	従二位	
1894	1894	27	65		日清戦争(7月~'95 4月)
1895	1895	28	66		下関条約調印(4月)
1896	1896	29	67	皇典研究所長兼國學院院長就任(6月)	
1897	1897	30	68		金本位制の確立(3月)
1898	1898	31	69		最初の政党内閣成立 (6月)
1899	1899	32	70	明治會叢誌廢刊	
1900	1900	33	71		北清事變日本出兵(6月)
1901	1901	34	72		義和團事件調印(9月)
1902	1902	35	73		第一回日英同盟締結 (1月)
1903	1903	36	74	正二位(6月)	
1904	1904	37	75		日露戦争(2月~'05 9月)
1905	1905	38	76		日英同盟改定(8月)
1906	1906	39	77	老年につき特旨を以て宮中杖を許さる	
1907	1907	40	78		英仏露三国協商成立
1908	1908	41	79	常宮昌子内親王ご婚儀	
1909	1909	42	80	周宮房子内親王ご婚儀 侯爵(4月)	
1910	1910	43	81	従一位(3月) 薨去(3/2)	

注

左の三冊については次の略称で記載する。

- 「日記」——「保古飛呂比・佐佐木高行日記」 全十二巻
東京大学史料編纂所著 昭和四八年三月 東京大学出版会出版
- 「昔日談」——「勤王秘史・佐佐木老侯昔日談」 津田茂麿編 大正四年三月 国見館出版
- 「臣高行」——「明治聖上と臣高行」 津田茂麿著 昭和三年二月 自笑会出版
- (注1) 「昔日談」 六五六頁
- (注2) 拙著 「道德現象考」 九六頁 昭和五八年四月 東京書館出版
- (注3) 寺石正路著 「土佐名家系譜」 六二六頁 昭和五一年二月 歴史図書社出版
- (注4) 寺石正路著 「土佐偉人伝」 四一七頁 昭和三年一月 富士越出版
- (注5) 「臣高行」 一〇三五頁
- (注6) 「佐佐木高行日記(前)」 一一〇頁 色川大吉著 東京経済大学会誌 五七号
- (注7) 「臣高行」緒言二頁
- (注8) 前掲 「佐佐木高行日記(前)」 一一〇頁
- (注9) アーネスト・サトー著 「一外交官のみた明治維新」 昭和三五年 岩波書店出版
- (注10) 「日記(4)」二九八頁 (以下日記の下の)内の数字は巻数を表わす
- (注11) 加藤文三他著 「日本歴史(中)」 九七七頁 新日本出版社
- (注12) 「昔日談」 一三頁
- (注13) 「昔日談」 八〇九頁

- (注14) 平尾道雄著 「子爵谷干城伝」 六〇七頁 昭和十年
- 「高知県人名事典」 昭和四七年七月 高知市民図書館出版
- (注15) 「昔日談」 一四頁
- (注16) 「日記(1)」 九頁
- (注17) 「日記(1)」 一〇頁
- (注18) 「日記(1)」 一一頁
- (注19) 「日記(1)」 一三頁
- (注20) 「日記(1)」 一四頁
- (注21) 「日記(1)」 一七頁
- (注22) 「日記(1)」 一八頁
- (注23) 「昔日談」 一七頁
- (注24) 「日記(1)」 一六頁
- (注25) 家永三郎著 「日本道德思想史」 八四頁 昭和四七年 岩波書店
- (注26) 「福翁自伝」 三九二〜三九四頁 昭和九年 時事新報社
- (注27) 「大隈伯昔日譚」 近代日本思想史講座 七、一六頁 中村光夫著 昭和三十四年 筑摩書房出版
- (注28) 「日記(1)」 二八頁
- (注29) 「臣高行」一〇一三頁
- (注30) 「日記(1)」 二〇頁
- (注31) 「日記(1)」 三〇頁
- (注32) 「昔日談」 二二頁
- (注33) 「昔日談」 八二頁
- (注34) 「日記(1)」 七八頁
- (注35) 「日記(1)」 五六頁
- (注36) 「日記(1)」 六六頁
- (注37) 「日記(1)」 四七頁

- (注38) 杉田幸雄編 「侯爵佐佐木高行先生」 三二頁 昭和十四年八月
- (注39) 前掲 「土佐偉人伝」 四一七頁
- (注40) 「日記 (1)」 一七四頁
- (注41) 「日記 (1)」 一八二頁・「侯爵佐佐木高行先生」二二頁
- (注42) 「日記 (1)」 一九二頁
- (注43) 「昔日談」 二頁
- (注44) 「日記 (4)」 五九頁
- (注45) 前掲 「佐佐木高行日記 (前)」 一二三頁
- (注46) 「日記 (2)」 二二五頁
- (注47) 「日記 (2)」 二七五頁
- 「山内家資料・幕末維新 五編 二六三頁 山内家史料刊行委員会 昭和五十八年十二月 山内神社宝物資料館出版
- (注48) 「日記 (9)」 二三〇頁
- (注49) 「日記 (10)」 四三五頁
- (注50) 渡辺昭夫著 「佐佐木高行の『中正』への情熱」 「歴史と人物」 七
六頁 昭和五三年十月
- (注51) 「昔日談」 二頁
- (注52) 「雋傑『坂本竜馬』」 四三頁 坂本・中岡銅像建設会編・出版 大正
十五年十二月
- (注53) 「日記 (2)」 三〇九頁
- (注54) 前掲 「土佐偉人伝」 四一八頁
- (注55) 「臣高行」 一〇一九頁
- (注56) 「昔日談」 五七頁
- (注57) 「臣高行」 一〇一九頁
- (注58) 「日記 (2)」 三九九頁〜四〇〇頁
- (注59) 「昔日談」 四三一頁
- (注60) 「昔日談」 四八一頁〜五〇〇頁
- (注61) 「臣高行」 二五頁
- (注62) 「日記 (2)」 四六四頁
- (注63) 「日記 (3)」 三六六頁
- (注64) 「昔日談」略歴 四頁
- (注65) 「臣高行」 三三〇頁
- (注66) 「日記 (3)」 三〇七頁
- (注67) 「日記 (5)」 二九六頁
- (注68) 「日記 (5)」 二九七頁
- (注69) 「日記 (5)」 三八一頁
- (注70) 岡田日吉著 「江藤新平伝」 一四八頁 昭和四三年六月 大光社出版
- (注71) 「日記 (5)」 三九九頁
- (注72) 「日記 (5)」 二九六頁
- (注73) 「日記 (1)」 六一頁
- (注74) 「臣高行」 三一〇頁
- (注75) 「臣高行」 六五頁
- (注76) 菅孝行著 「日本の思想家、近代篇」 一一頁
- (注77) 前掲 「日本の思想家・近代篇」 一〇頁
- (注78) 武田清子著 「天皇制思想と教育」 九頁 昭和四〇年 明治図書出版
- (注79) 「日記 (8)」 五〇頁
- (注80) 「臣高行」緒言 三頁
- (注81) 鳥海靖著 「明治をつくった男たち」 一九〇頁 昭和五十七年二月
PHP研究所出版
- (注82) 「日記 (9)」 四〇五頁
- (注83) 前掲 「佐佐木高行日記 (前)」 一〇七頁
- (注84) 森嶋道夫著 「日本はなぜ成功したか」 一七〜一八頁 昭和五十九部

四月 TBSブリタニカ出版

(注85) 「昔日談」 六六〇頁

(注86) 「日記 (2)」 四〇三頁

(注87) 「昔日談」 六七二頁

(注88) 「臣高行」 九七七頁

(注89) 「臣高行」 九七八頁

(注90) 拙稿「ハルトマン倫理学の価値綜合に就いて」 参照 日本大学文学部

研究年報 第二輯 五七頁

拙稿 「悪と人格性の関連」——カント倫理学——参照 日本大学文学

部研究年報 第四輯第一分冊 一一頁

(注91) 「昔日談」 六九七頁

(注92) 前掲拙著 「道德現象考」 二〇頁

この論文を書くにあたり、御指導、御声援を賜りました左の諸氏に深
甚なる謝意を表します。

山内 豊秋氏 (旧土佐藩 第十八代御当主)

佐佐木行美氏 (東京大学理学部 教授)

渡辺 昭夫氏 (東京大学教養学部 教授)

水岡 道三氏 (東京書館々主)